



I

閃の軌跡
クロウ・アームズ・ラスト・夢小説
PDFサンプル
デフォルトネーム記載アリ

七
歴
一
三
〇
三
年
。
本
は
と
あ
る
人
物
が
大
切
な
相
手
を
得
て
し
ま
う
物
語
だ
。

四月……………〇〇五

五月……………一〇九

六月……………一八九

七月……………二七七

八月……………三七九

1203年04月

ARCUS試験運用チーム
活動報告書

- 1 -

噛み合わない呼吸、湖畔にて

一二〇三年四月十日（金）

入学式も終わり、各授業のさわりが済んで、新入生の大半がこれから本当にやっていけるのだろうかと不安になり、そうして無情にもライノの白い花が散り始める時期。

私は朝のHR終了後に、本日放課後に学院敷地の端の方にある旧校舎へ出頭するようというお達しを担当教官から受け取った。そうして夕暮れに染まる道を歩いてそちらへ顔を出すと、既に数人が談笑をしていたのだ。遅れて入ってきた私の音に対してか、全員がこちらを見る。一応、全員顔と名前は知っていた。

「えっと……」

一番手前にいるのが、ハーシエルさん。学院切つての才女だとかで、既に先生たちの覚えもめでたいらしい主席入学者だ。この学年で知らない人間はいないだろう。

そのハーシエルさんに抱きついているのが、この中で唯一貴族生徒制服を着用しているログナー嬢。四大名門ログナー侯の一人娘であり、後継であると噂をされているが、噂の域を出ない。まあそんな重要なことを学生生活の話の種で言うわけもないだろう。さもありなん。

その二人の対面にいるのがノームさんと、アームブラストさん。ノームさんは技術生枠で入った人材でまだ四月半ばだというのに制服よりも作業服で見かける回数の方が多いくらいの人だ。

アームプラストさんは他クラスの自分にもキャンブル話を持ちかけられたら断っておけという話が回ってくるほどの人物。それなりに腕はいらしい。

まあどれもこれも、差し障りのない表面だけさらったような人物評だけれど。共通するのは、誰も彼もそれなりに有名人だということだ。実技一年トップクラスと名高いログナー嬢とアームプラストさん。エプスタイン博士の三高弟と名高いシュミット博士の弟子であるノームさん。そして一年生だというのに生徒会入りを熱望されているハーシエルさん。

そしてどうやら談笑していた通り、四人はお互い面識がある面子らしい。けれどここに自分が追加で呼ばれる理由が全くもって分からないので、もしかして伝達される生徒が自分ではなかったのだろうか、と考え始めた。ところで。

「あら、全員揃ってるわね」

どうやら生徒では自分が一番遅かったらしく、後ろの扉からサラ教官とマカロフ教官が現れた。急いで退こうとして、とっととと、とすこしつんのめって歩を進めると、そっとハーシエルさんが隣を指し示してくれた。一緒に聞こうということだろうか。

「ありがとう」

小さく感謝を述べると、柔和な笑みが返ってきたので、つられて自分も笑ってしまった。壇上へ二人が昇り、表情を引き締めるとサラ教官が大層楽しそうに口を開く。

「さて、君たちに集まってもらったのは他でもない相談があるからんだけど」

カツリ、カツリ、何だか嫌な予感がする。この二週間、あの笑みでロクなことが起きたような気がしない。

「とりあえず落ちてもらおうわ」

ポチリ。壇上の奥の柱あつたらしい小さな蓋を開いた教官が何かのボタンを押した瞬間、私たちの足場から平衡さが消えた。強制的な急角度の坂の先、見えるのは真つ暗闇で、最後に壇上へ視線を投げたときに見えたのは変わらず楽しそうなサラ教官と、頭を抱えたマカロフ教官の姿だった。

「……あてて」

一応空気の移り変わりから底が近いと受け身を取ったはいいけれど、さすがに勢いを殺しきれなかったみたいで右肩をそこそこ強く打ってしまった。左腰ポーチに入っているカメラの破損は免れたと、思う、多分。免れていて欲しい。それに他の四人は大丈夫だろうか、と周りを見渡したけれど無情にも上は閉められたらしく生憎の暗闇であまり視界が通らない。

「あ、アンちゃん!? 下敷きにしちゃった!?!」

「ああ、トワは無事かい?」

そんな声が聞こえてくる限り、あの二人は大丈夫だろう。わりと近くにいたのに離れているということから推測としては、坂道そのまま滑っていつてしまえば加速がついたハーシエルさんをログナー嬢が庇うために下へ潜り込んだとかそういうところだろうか。……噂通りの人物だ。

「あつ、一応みんなの無事を確認しておきたいな。トワ・ハーシエル、無事です」

暗闇の向こうからそんな声が聞こえてきた。なるほど。

「最後に校舎へ入ったセリ・ローランドに怪我はナシ」

「クロウ・アームブラストおなじく」

「ジョルジュ・ノーム、無事だよ」

「アンゼリカ・ログナーも五体満足さ」

「アンちゃん本当に怪我してない？」

「当たり前さ。勿論トワが私の体をくまなく確認したいというのならやぶさかではないけれど」

そんな戯言を聞き流しながら立ち上がってズボンの埃などを払うと、うっすら暗闇に慣れてきた視界と反響音などを鑑みて少し広い場所に落とされたいと予測を立てる。

『はあい、それじゃ本題に入るわね』

こちらの無事を疑っていないのか、天井に埋め込まれたスピーカーから機械分解されたサラ教官の声が広場に響いた。

『君たちにはそこに置いてある武器と戦術オーブメントを今から使ってもらって、地上を目指してもらおうことになるわ』

その声で、ぱっと一部に明かりが付き、壁際にある一つの台に視線が吸い寄せられる。

そつと各々警戒しながら近づいて行くと、それぞれが授業で使っているであろう学院側へ預けている得物と、その戦術オーブメントらしき端末を重しとして名札メモがともに置かれていた。

手に取って、ばかり、と開いてみると汎用戦術オーブメントとは全く違う回路が組まれているが見える。中心にはまっついている一際大きな結晶回路クォーツを撫でると、瞬間、キーン、と耳鳴りとともに端末が青く光り、繋がった感覚を得た。……これは。

『それは第五世代戦術オーブメント、通称《ARCS》。ラインフォルト社とエプスタイン財団が共同開発したもので、君たちにはその試験運用を行ってもらいたいのだ』

その言葉にARCSへ視線を落としていた全員が顔を見合わせる。

『どうして自分たちが、って言いたいところでしょうけど、適性があった。それが一番大きな理由ね。他の細かいことは後で説明するから、まずは地下であるそこから一階まで上がってきなさい。以上』

言いたいことばかり言って、プツン、とスピーカーからの音は途絶えた。と思ったら何かノイズがまだ聞こえ、あー、とテストするような男性の声が入ってくる。

『マカロフだ。補足しておくのだが、一応戦力として問題ないだろうと判断したチームを組んじやいる。ただどうしても踏破が無理だと判断したら置いてあるメモの緊急連絡先に連絡を寄越すように。ARCSには従来の戦術オーブメントにはなかった通信機能も組み込まれている。バッテリーを考慮して今回の連絡はスピーカーでやってるが、使えることは確認済みだ』

それじゃあな、と今度こそ静けさが訪れ、それにつられて天井へ視線を上げたところでいつの間にかうつすらと明かりがついていることに気がついた。

「えっと、どう、しようか」

全員が困惑の気配を出しているところで、ハーシエルさんが控えめに口火を切る。

「どうするも何も、文句を言うに上にながらなけりや話にならねえってことだろ」

「みたいだね。サラ教官もスパルタだ。僕はもう参加が決まってるのに」

「ああ、ジョルジュは技術枠で参加の話が通っているのか」

「そういうこと」

そんな話を聞きながら、腰のポーチから導力カメラを取り出し点検する。うん、目に見える破損はない……と思う。薄暗くてよく分からないけれど。取り敢えずそれに頷いて、台の上に置いてあった片手剣とガード用のダガーを腰に差した。

「両剣使いか？」

「ええ。斥候兼ねて軽装めで。そういうそちらは……双銃ですか、格好いいですね」

話しかけられた相手——アームブラストさんへ視線を向けると相手も腰のホルスターに銃を収めているところだった。ちらりとノームさんへ視線を向けると、足元に置いていた大きなモノを見せてくれる。

「巨大重槌……まあハンマーだね」

小回りは利かないけれど大きなダメージは期待できる武器、という認識で合っているだろうか。私のクラスにハンマー使いはいないので印象だけだ。

「私もクロウ君とおんなじ導力銃が武器だけど、基本的には導力魔法オーバリアルティの方が得意かな」

台に残っていた銃を一丁、ハーシエルさんが手に取る。少し手に余るグリップのような気がするけれど大丈夫だろうかとぼんやり心配になってしまった。

「そしてこれは私のだね」

残っている籠手をログナー嬢が慣れた手つきで腕へと固定し、がん、と両拳を合わせて金属音が鳴る。拳闘士。完全な前衛だ。……なるほど。確かにバランスは一応取れている。

「ええと、四人は友人同士……ということですか？」

貴族生徒一人と平民生徒三人なんて、珍しいどころの騒ぎではない。取り巻きという雰囲気もないのだから尚更だ。

「まあそんなようなものかな。私とジョルジュは元々知り合いで、他の二人とは出会ってからそこまで経ってはいないけれど……それにしても、セリ君と言ったか。君も大層美しい少女だね。

他クラスにここまでの逸材がいただなんてチェックし損ねていた、ここでお近づきの印に」

言い寄られながらするりと取られた手を、握り込まれる前にするりと抜き、一歩さがる。

「おや」

「取り敢えずこの面子だと私が斥候役っぽいので、先に」

行ってきましたね、と爪先の方向を変え離脱しようとしたところで、ぐい、とハーシェルさんが私の手を両手で掴んで引っ張った。

「あの、さっき安否確認したときに名前は教えてもらったけど、一応、改めて自己紹介してもいいかな」

健気さを思わせる金糸雀カナリヤ色の瞳が、真っ直ぐと私を見て、そんな提案をしてきた。自己紹介。それもそうだ。これから一応、最短でなら上階までだけれど、命を預け合う相手になる。それに斥候なんてそこそこ重要だろう職務だ。初めましてで挨拶も簡易に、というのはあまりよろしくなかっただろう。失敗。

「えっと、じゃあ、お願い出来ますか」

にこり、私の手を離して彼女は自分の胸に手を当てる。

「一年IV組、トワ・ハーシエルです。戦闘訓練は一通り受けてはいるけど、サポートがメインになると思います。よろしくね」

「それじゃあ次は私かな。I組のアンゼリカだ。あまり身分は気にせず接してくれると嬉しいな。君みたいな可愛い子なら大歓迎さ」

「ばちん、とウインクをされて、はは、と苦笑いをしてしまう。」

「僕はIII組のジョルジュ。すこし話していたけどこの試験運用には技術支援として既に参加が決定してる身でね。でもチームを組むならこういう機会は貴重かなと思ってる」

「V組にいるクロウだ。まあ二丁銃だが、ある程度ならアーツもこなせるからいざって時は中衛よりも後ろに下がることもある、つてくらいか」

次々に自己紹介をされていき、最後に私の番になる。いやこの面子、どうやってこの二週間で友人になれるのか全く分からない。不思議が過ぎる、と思いつながら、少し咳払い。

「VI組のセリ・ローランドです。割と身軽なので偵察とか担当かなと勝手に思っています。一応前に出ますが、攻撃を受ける形の盾は不得意です。アーツは……あんまり適性がないので、その辺りはよろしくお願いします」

この二週間の模擬練で、アーツの適性が本当になんかわかってる。私だって広域導力魔法を使ってみたかったけれどこればかりはもう仕方ないことだ。

「うん、ありがとう。よろしくね、セリちゃん！」

セリちゃん。

「あつ、ご、ごめんね。名前で呼ばれるのイヤだったかなあ」

「ああ、いえ、別に。大丈夫です」

「というか女子でいいんだよな」

「そうですけど、何か問題でもありますか？」

「いや、スカートじゃないから一応の確認っただけだ」

言われて、ああなるほど、と思いつく。制服の上着は女生徒支給よろしく腰にリボンがついているものだけれど、下はスカートではなくズボンだ。選択制なので特に校則違反というわけではなく、まあスカートが可愛いのであまりそれを選ぶ人がいないというだけで。実はネクタイもカラーバリエーションがあるので、士官学院というわりによりガチガチではないのが意外だった。名門ゆえの自由さと提携学用品店のセンスということだろうか。

「バトルスタイルのそこそこ動き回るので、考慮すべきことが多いスカートは不適當かなと」

というか、ログナー嬢も貴族制服且つズボンなので、実はこの面子だとスカートなのは一人しかいない。うっかりすると女性一人に男性四人の紅一点パーティに見えるかもしれないなあ、とぼんやり思考する。まあそれはいいか。

「取り敢えず、よろしくお願いしますね」

言いながら拳をすこし前に出すと、四者四様で返事をしながら拳をぶつけてくれる。

そんな姿を眺めながら、何となく、長い付き合いになりそうだとすこし楽しそうな予感を覚えつつ私たちは広場の扉へ歩を進めた。

全員武器を構えながら扉を開けてすこし進んだところで、左手を後ろへ出して止める。

「10アージュ先、飛び猫系統の魔獣二体」

すこし暗がりで見え辛いけれど、羽音や魔獣図鑑で見たシルエットから敵を認識する。もちろん完全に接敵・分析する前に確定するのは危ないけれど、それは全員わかってる。

「……射撃が弱点なことが多い魔獣か」

アームブラストさんがすこし私の横へ進みでながるりと片銃を掌で遊ばせたけれど、その横顔に笑顔は浮かんでいなかった。……いつも笑っているような雰囲気だったのに、こんな顔もするのかと勝手ながら思ってしまった。

「一応、僕が突っ込んで盾になりつつ撃破する案もあるけど」

重槌を両手で構えているであろうノームさんがしんがり方向から提案をしてきたけれど、それは私が否定する前にハーシェルさんが首を振った。

「相手が視認出来ない状態なら、それを守るべきだと思う」

「まあ、要らぬリスクを抱え込む必要はないね」

話が早い四人だと思う。そして、作戦の最終的な決定権がハーシエルさんにある、と信頼を寄せているというのも大きいのだろう。そこにぼつと出の私が加わっているのも、もしかしたらお邪魔かもしれないけれど。

「オレが右をやる。トワ、お前は左を狙えるか」

アームブラストさんは一丁だけ構えてそう言った。

そう。これは当たればいいわけじゃない。騒ぎを聞きつけて他の魔獣が集まってくるかもしれないことを考えると、同時に、静かに、絶対に逃さないという意志で以て倒さなければならぬ。つまりヘッドショットだ。

銃を構えるハーシエルさんが前に出てきたので、ちよいちよい、と片膝ついてしゃがんだ自分の肩を指す。意図が伝わったのか、それを支えにして彼女は銃を両手で構えた。うっすらとした闇の中に羽音だけが反響する場所で、自分の指サインによるカウントダウンのゼロと共に導力銃が起動し、飛び猫二体は無事に光となって消えた。銃声によって追加の魔獣が出てくる気配は：うん、なし。

「ナイスです」

立ち上がりながら親指を立ててハーシェルさんへ示すと、彼女は嬉しそうに手を同じようにしてこつんと当ててくれる。

事実、アームブラストさんと私は、ハーシェルさんが外した時の追撃をする準備がおそらく出ていた。仲間を呼ぶ隙を与えないというのが大前提だったので、もしもを考慮するのは大切だ。ログナー嬢もその可能性には気が付いていただろうけれど、ハーシェルさんを信用しているからかそういったそぶりは見せなかった。

だからその追撃が要らなかったというのは大きい。そもそも私にとっては四人がどれだけの戦力なのか、というのはイマイチわからないというのもある。ログナー嬢とアームブラストさんの実技に関する噂は聞いてはいるけれど、他二人に関しては未知数だ。そして現時点から、丁寧に照準を合わせられるのなら彼女の腕はアテにしてもいい。

「お前さんもな」

ぐしゃり、隣から急に髪を乱される。

「……いきなり頭を触らないで下さい」

他人の急所を撫でていいのはとても親しい相手だけだ。私にとってアームブラストさんは特にそういう範疇に入っていないし、相手にとっても私がそこに入っているわけではないだろう。というか入っていたら怖い。

「おっと、悪い」

大して悪いとも思っていない、悪し様に言うのであれば軽薄な笑いと共に両手を上げてすこし離れる。＼そういうポーズ＼を取る、お兄さんポジションでいたいかのような。……まあいいか。あんまり他人を勝手に分析して決めつけるのも良くない。悪いクセだ。

「取り敢えず進みましょうか」

私の言葉へ特に異論は出ず、そのまま五人で連れ立ってまた歩き始めた。

「……5アージュ先の曲がり角を右に行ったところに、ドローメ種が複数いますね」

ぬちゃ、ぬちゃ、と粘度の高いこの音は特徴的だ。けれど音から属性を特定できるほど場数を踏んでいないのでそこまでにとどまる。ドローメ種は視認しないと数の特定がしにくいのが厄介だ。

「ドローメというと、ぬめつとした魔獣であっているかい？」

「はい。斬撃以外ほぼ無効なため、剣か魔法での攻撃が有効ですね」

突撃も射撃も剛撃もあまり意味をなさない。

「じゃあ接敵し次第、私がディフェクターをかけて分析するのがいいかな」

「いや、トワはアーツに集中してくれるほうがいい。分析は僕が請け負うよ」

ハーシエルさんの分析戦技は彼女のアーツの威力を後押しするけれど、その分本人のアーツ駆動が遅くなってしまふのが難点だ。もう一人アーツが得意な人がいたら生かせるのに。まあ現状無い物ねだりにしかなるまい。

「今回は私も前に出るけれど、単純に引きつけるだけになるかな」

「そうですね。私と一緒に前へお願いします」

「ふふ、美少女の頼みなら是非もないさ」

……ぞわつとする物言いだけれど、ぐつと飲み込んで、代わりのように片手剣を両手で握り込む。粘性魔獣にはガードのダガーは効果が薄い。なら斬撃に力を入れた方が効率がいいはずだ。

「では行きます」

姿勢を低くし、曲がり角の直前まで呼吸を殺して近づく。三体。前衛二人が視認したところで、挑発戦技を使いつつ同時に踏み出した。奇襲された魔獣は体勢を整えようとするけれど、すかさずノームさんの分析戦技が割り込みその体勢をさらに崩す。

脳天を叩き割るように私の一撃が一体に入り、ログナー嬢が気を引いていた二体へハーシエルさんとアームブラストさんの魔法が入りその身体を燃やした。想定以上によく燃える。ランタン火種にいいんじゃないだろうかと全く関係のないことを考えてしまうほどに。まあ導力灯が普及した今、アナログな灯りの出番は殆どないけれど。

しかし二人のアーツも致命傷までにしかならなかったのか、最後の最後で悪あがきをしようとする気配を感じた瞬間、ノームさんが重槌をスイングをすることで一瞬だけ斬撃属性を作り出したのか全個体が無事に沈黙を果たした。

「……」

凄い。全員が全員、その場で出来ることを考えて、行動し、実行し終える。その精度が高い。いや、こう表現すると何様だという目線になってしまうけれど、すこし、わくわくしてしまっただ。出来ることならもつとこの五人で戦ってみたいと。いろんな景色が、見られるんじゃないかと。……ログナー嬢の行動だけはどうかするなり、自分が慣れるなりしなければならぬけれど。

「セリちゃん？」

「あっ、すみません」

もうみんな次に進むことを考えて、私を待っていてくれた。

「いま行きます」

出会ったばかりの自分の能力を、信頼してくれる人がいる。これはもしかして幸福なんじゃないだろうか、なんて。

「……」

「遠距離続いて戦闘に参加できないからって微妙な顔すんなよ」

「二人の綺麗な顔に傷がつかないのは私にとっては歓迎したいことだけどね」

「機器バックアップなら僕の範疇だけどそういうわけにもいかないしなあ」

「このままみんなで力合わせて行こっ」

「コインピートルの羽音って、結構きれいな音だと思うんですけどすよね」

「そーかあ？ 結構耳障りだろあれ」

「ふむ、あまり羽音を意識したことはなかったな。今度きちんと聞いてみよう」

「戦闘記録としては録音しておく方がいいのかもね」

「そうそう、みんな戦闘記録ちゃんとしておかないとたぶん泣くことになるよ」

「……っ」

そうして、呆気なく、とまではいかないけれど、自分の偵察を信じてくれる人がいるというのはこんなにも勇気がもらえるものなのか、と考えたりしてしまったのは確かだ（勿論このテストに使われている旧校舎は既に教官のチェックが入っているだろうというのは自明の理ではあるのだが）。

だから。

「アンゼリカ！」

「ARCUUS駆動……！」

「ディフェクター！」

まさか安全だと判断した最後の広場に、こんな暗黒時代の魔導による産物——ガーゴイルが立ちただかるだなんて思ってもいなかった。明らかに自分の判断ミス。けれど、ここで自分だけが突貫しても決定打は与えられない。石は斬撃よりも剛撃に弱い。つまり自分がすることは一つだ。

挑発戦技を使って敵の気を引き、その時まで耐える。回避も防御もし損なうとかなり一発一発が重いけれど、すかさずハーシエルさんの回復魔法が胴体に入ってくる。

吹っ飛ばされて一瞬戦線離脱をしていたログナー嬢も復帰し、私の意図を読み取ってくれたのかこちらに攻撃を集めた、そうして。

「スクリュー・ドライブ！」

隙を突いてノームさんの重槌による渾身の一撃が魔導器物の背中へ穿たれる。

よし、と気分が高揚した。刹那、全員の一拳手一投足が見えるようにすべてがクリアになっていく。何が起きるのか。何をしなければならぬのか。全員が自分の得物を握り、フレンドリーファイアーにならないところを見極め踏み込み、総攻撃を果たしたところで石の守護者は物言わぬ塵となり消え去った。

「……っ」

その光景にがくりと力が抜け、地面に手をつけて首を垂れる。いや、まだ安全確認が終わっていないので膝をつくなどという話なのだけれど。それでも全員疲労困憊なのか、各々自由に地面へ腰を落ち着けている。

「ティア」

ふわり、回復魔法が入ってきて何だと思ってみると、疲れた表情のアームブラストさんがこちらに腕を伸ばしてきていた。ハーシェルさんはログナー嬢へ。ノームさんは盾としての回復戦技があるのか、徐々に傷が治っていつているような状態が見える。

「気がついてねえかもだけどよ、酷い状態だぜ」

「あは、それは、どうも。アームブラストさん」

まあでもそんな全員なのだろうけれど、失敗したということを重ねる背に乘せてしまっていたのかもしれない。気を張りすぎたともいう。

そんな戦闘後処置をしていたところで階段の上から、キィ、と扉が開く音がして弾かれたように得物を握り込んで視線を上げると、現れたのはサラ教官とマカロフ教官だった。ドッ、とその瞬間疲れが肩のしかかっていたのを自覚する。

「はい、全員揃ってるわね！ うんうん、重畳重畳」

「本当に落とすとは思いませんでしたよ、サラ教官」

そんなことを言いながら階段を下りてきた教官たちはぼろぼろの私たちの前に立っていろんな説明をし始めた。ARCUのこと、中心結晶マスターコアのこと、ARCUの最大の特徴である戦術リンクと呼ばれる画期的機能のこと、試験運用メンバーになるならある程度外部への特殊課外活動が発生することなど。そしてその担当が新任のサラ教官になる、ということなど。

ちなみにARCUについてはβ版にあたるので、まだまだ解放されていない機能もあるのだとか。

「さて、今回の初期運用を受けて辞退するなら辞退するで構わないわ。残りの面子が困るとかも考えなくていいわよ。その辺りのことはちゃんとこちらで巻き取るから」

つまり、このまま続けるか否か。

この数日授業を受けた印象としては、サラ教官が本当にそういう補充人員や対応策を考えているのか怪しいものだとは思ってしまう。とはいえ、私の答えは決まっているようなもので。

「はい。一年VI組、セリ・ローランドは参加を希望します」

「ジョルジュを除けば一番乗りね」

「楽しくなりそうだなと思ったので」

私は、正直軍属になる予定はないけれど自立手段への道がいろいろありそうだと思ってここへ来た。正式カリキュラムに $1+a$ はきつと学生生活的にはキツイこともあるだろう。でもまあ何とかなるんじゃないだろうか。

そして何より。見てみたいと思ってしまったのだ。この先の風景を。出来ればこの五人で。

「私も参加しようかな。正直模擬練だけでは体が鈍ってしまいそうだと思うっていたしね」

「じゃあオレも参加ってことで」

口々に手が上がっていく。

教官が立っているのに生徒は座っていて、士官学院としてはあるまじき規律のなさかもしれないが、それを気にする教官はここにいなかった。サラ教官もだけれどそういう意味ではマカロフ教官もかなりゆるい方なのかもしれない。

「……」

最後の一人であるハーシエルさんはすこし悩んでいるみたいだった。賢い人だから、きっとこれから起こり得るいろんなことを考えてしまうのだろう。視野が広いというのも大変そうだなとぼんやり思った。

「まあ、ここで判断が難しかったら来週でも構わんど。なんせ急な話だからな」

このままでは埒が明かれないと思ったのか、マカロフ教官がそう提案を口にする。うーん、主導としてはサラ教官で、戦術オーブメントに関する事なので導力学専攻のマカロフ教官がサポートに入っている形なんだろうか。

「——いえ、一年IV組、トワ・ハーシエルもARCS試験運用に参加させて頂きます」

それはすこし悲壮感がありそうな声ではあったけれど、何かを決めたのだろうかと容易に感じさせ、また踏み込むことを許可しないようなものでもあった。彼女は彼女で、何か思うところがあるのだろうか。

サラ教官は満足そうに頷いて、私たちに立ち上がることを促す。

「それでは、本日よりARCS試験運用チームを発足する。詳細は後日また連絡するわ」

そうして、私たちの散々な放課後はようやくやく終わりを迎えた。

これがまさかずっと後まで続く縁になるとは誰も思わぬまま、歯車は回り始めたのだ。

「そーいやチーム組むわけだし、タメっていうか取り敢えず名前で呼んでくれねえか」

そんな提案がされたのは旧校舎から帰ろうというところであった。

「……私？」

一応それを請われている対象を確認しようと、アームブラストさんに向いたまま自分を指差ししてみると頷かれる。まあ自分しかいないよなと思う。だって他の四人はもう友人同士で名前を呼び合っているのだから。

「アームブラストさん」ってめっちゃくちゃ長いから咄嗟の指示出ししたい時に絶対ラゲるだろ。クロウなら三文字だしな」

一理ある。しかし私は彼をそう呼んだらどうか。基本的に長いから口に出さないようにしていたはただけれど。いや、呼んだな。さつき。ティアをかけてもらった時に。

「うーん、他の人も名前で呼んだりタメでいい、なら」

コミュニティ内で名前を呼ぶ、名字で呼ぶ、タメ口、というのを人によって分けると面倒くさいので全部一律にしたかったのだけれど、どうだろう。しかしそんな懸念とは裏腹に、全員快く頷いてくれたので、何とにかみんな人がいいなあ、なんて考えてしまう。

「じゃあ、改めてよろしく。クロウ、トワ、ジョルジュにアンゼリカ」

この一年は退屈しなさそうだななんて思いながら、私はそう挨拶をした。

一二〇三年四月十五日（水） 放課後

結局あの日からすこし導力カメラの調子が悪いので技術棟に顔を出してみると、カウンター奥の方にジョルジュがいた。けれど何やら別の作業をやっているみたいなのでどうしようかな、と悩んだところで顔が上がり見つかってしまう。

「ああ、セリか。どうしたんだい」

「……カメラのシャッターがこの間の落下からちよつと調子悪くて」

声をかけてくれたのだし、と腰のポーチから取り出してカウンターに置くと、すこし振ったり何だりをして、内部でパーツがズレているのかもしれない、とアタリをつけてくれた。

「それって直ぐに直せるもの？」

あとあんまりカメラの修理にお金をかけられるほど余裕はないのだけれど。

「うん。まあ数十分くらいかな。何なら今直ぐ直そうか」

「……幾らぐらい？」

技術棟に物を持ち込んだことがないので、相場がわからない。つまるところ吹っかけられても分かりはしないのだけれど、それはそこ、ジョルジュという人物を信じるしかないだろう。あんまりそういう波風立てるようなことはしなさそうではあるし。

そんなことを考えていると、ははっ、と笑われてしまい、疑問符が頭の上を巡る。

「いや、こういった案件は学院公認で補助も出てるから気にしなくていいんだよ」

曰く。専門の技術者を雇うより学生がやった方が技術向上並びに近隣住民との交流ともなるので、学院生やトリスタ住民の持ち込みに関しては無償引受をして、その実績を学院に提出することです。いろいろな単位となったり技術棟の備品が良くなったり、そういうことらしい。なあんだ。

「それなら遠慮せずに頼もうかな。あ、でも別に今直ぐじゃなくてもいいよ」
急ぎの用事があるならそっち優先してくれて全然構わないのだ。

「いやいや、肌身離さず持つてゐることは、それだけ大事なんだろ？ 直ぐにやるよ」
大事。まあ。うん。大事な物だ。入学祝いにお世話になっている叔父さん叔母さんから買ってもらったもので、大切にしたいもののも一つでもある。

「それに確か……一人新聞部、だっけ？ それでカメラ構えてるって聞いたけど」

「まあね。いろんなこと知りたいな、知って欲しいなって思ったらそれがいいかなって」

なんせこの学院、写真部はあっても新聞部はないのだ。なら一人でやるしかない。クラス担当の教官に相談したら、それなら私が顧問になりますよ、と言ってくださったのは僥倖にすぎる話だった。

「なるほどね」

世の中、うっかりしていると葬り去られることも多く、そのことに直面してただ嘆いていた時期もある。どうしてなんだろうって。いろいろ悩んで、聞いたりして、調べて、つまりそれは誰も知ることが出来ないからだと私は思った。誰もが知る情報流通に載せられないからだ、と。

だからその情報を私はまず取得することから始めようと考えたのだ。もちろんそれが握り潰されることもあると知っているけれど。

ジョルジュは直ぐに工具を並べて作業を始めてくれたので、私は室内にある椅子を一つ持ってきて最近集めた記事を書きつつ作業を眺めることにした。

「うん、調整終わったよ。少し試してくれるかい」

「わ、ありがとう！」

購買部の入荷情報や食堂の一週間の予定メニューなどをちまちまとめていたら、作業が終わったらしくカメラを渡される。少し汚れていたところもしっかり拭かれていて、ああもつと自分が大切にしてあげべきだったなと反省。

「ちよつと撮ってくるね！」

シヨルダーストラップを取り付け、ばたばたと書き物もそのままに技術棟を飛び出した。

どうしようかなと悩んだところで風が吹いたのでグラウンドの方へ足がむく。グラウンドを見渡せるベンチが置いてあるところから、誰もいない閑散とした風景にシャッターを切った。自由行動日だったらたぶん人が残っていたりしたんだろうけれど、まあこういう風景も悪くはないと思う。ライノの葉っぱが太陽で赤くなっているのも綺麗じゃなからうか。

「あれ、カメラ直ったの？」

声をかけられて振り向くと、Ⅱ組のフィデリオがそこにいた。

「うん。ジョルジュが直してくれたんだ」

カメラを胸の前に掲げると、よかったよかった、と彼は喜んでくれる。

フィデリオとは写真部に見学に行った際にかちあつて、そこからいろいろカメラ談議をした仲のだけれど、貴族だというのに面倒見がいいというか、気さくというか、自分は貴族というものに少なからず偏見を持ってしまっていたので、よくなかったな、なんて一人反省したりもした。

「ジョルジュ君はカメラのメンテナンスまで出来るなんてね。僕も頼んでみようかなあ」

「うん、いま試した限りシャッター時の変なつかかりもなくなってるし、やっぱ技術梓で入ってるだけあって腕はいいみたいだね。また何かあったら私も頼むと思う」

とはいえ、あんな不意打ちの落下は今後そうないと思いたいのだけれど。

そんな風に話していると、本館屋上から最終下校鈴が敷地内に鳴り響いた。

「あ、荷物置きっぱなしで来ちゃったから戻らないと。じゃあね」

「うん。気をつけて」

「そっちもねー」

手を振りながら技術棟へ戻ると、さすがに閉めるのかジョルジュが後片付けしていた。

「荷物置きっぱでごめん」

「ああ、帰ってきてくれて良かったよ。通信するところだった」

「初通信がそんな情けない用件は避けたいなあ」

カメラを丁寧に腰のポーチへ仕舞ってから、放り出していたノートなどをまとめ始める。

「でも数回は使い方きちんと確かめるために通信しておくべきだろうね」

「それは確かに」

一応全員の通信番号はメモっているとはいえ、使い方自体が覚えないというのはそもそもよろしくない。筆記用具などを全部鞆に入れたところで、ジョルジュの片付けも終わったのかカウンターから出てくる。

「作業服のまま帰るの？」

「ああ、今日はちよっとこのまま出てきたから」

「合理的だねえ」

うん。機械油とかで汚れるのがわかっていいるなら、わざわざ制服を着る機会も少ないというのもわかる話だ。二人で技術棟を出て、しっかり施錠する。

「でもハイインリツヒ教頭とかは何も言わないの？」

校則にかなりうるさい人を引き合いに出すと、それがあんまり、と返事が返ってきたので、彼がシュミット博士の愛弟子だというところからコネ的なものを感じているのかもしれないな、と推測をしてみました。でもこれはジョルジュの腕を認めていないようでなんだかなあ、という気分にもなるのだけれど、教頭がそれを考慮していると信じられるかというところ。……うん。

「あれ」

ジョルジュが声を上げたのでいつの間にか落ちていた視線をあげてみると、前方に青い腕章をつけた貴族制服の男子生徒と歩いているトワが見えた。男子生徒はたぶん生徒会役員だ。

「……勧誘かなあ」

「十中八九そうだら」

声がして二人で振り向くと、よつ、と手をあげたクロウが学生会館から出てくるところだった。今日は食堂にいたらしい。

「まあ二二〇期生どころか、ここ十数年以上見渡して才女って言われてるもんねえ」

「本人はそれに納得してねえみたいだけだな」

謙虚が過ぎると傲慢というものだけけど、彼女に関しては自己評価が低いという感じもしないので、なんかというか印象としては不思議な人だ。どうもこの試験運用チームに選ばれたこともいまだに悩んでいるらしいのが、それに拍車をかけるのだけだ。

「……」

ぱちりと目が覚めた。窓から外を見るとまだまだ月が輝いていて明らかに夜だということを教えてくれる。妙にはつきりとした意識を鑑みるに、滅多にない気配を感じたのかも、と少し意識を警戒へチューニングし、護身用にダガーベルトを腰に回してから部屋を出る。

Tシャツにズボンという出で立ちもどうかした方が良かったかもしれないけれど、杞憂だつたらさすがに恥ずかしいのでまあいいかと思ったのだ。

音を殺しつつ階段を下りながら気配を探る。

ここは士官学院の学生寮で、女子生徒は防犯のために三階に住んでいる。二階には男子生徒もいるわけで、つまりどんな思惑があってもここには手を出さないとされている。でもその裏をかく人間がいなくても限らないのではないかと。

二階から一階へ下りる階段のところで呼吸を整え、階下に意識を譲ると。……厨房から音がする。いや、これは、うん。たぶん。知ってる。

「……」

そつと食堂へ通じる扉をあけ、奥のカウンターにいる人影を視界に捉えるとやっぱり想定していた人物がそこでお湯を沸かしていた。月光の薄明かりと僅かなコンロ上の導力灯に照らされているのは大地を思わせる茶色の髪を下ろし、薄水色の寝巻きを着て赤と緑のチェックなストールを肩からかけている小柄な影……トワだ。

「眠れなかったの？」

そう声をかけると、まるで気が付いていなかったのか驚いた表情で彼女はこちらを見た。

まさかトワを妙な気配と勘違いするとは。自分もまだまだだなあ、と内心苦笑する。

「あ……セリちゃん。うん、ちよつとね」

「紅茶淹れるなら自分もご相伴にあずかっていいかな」

食堂と厨房の境目にあるカウンターから声をかけると、うんいいよ、と。本当に優しい。

トワがお湯を沸かしているの、自分も何か出来ないかなと考えたみたくところでハツと思いで作られているメープルシロップを取ってきた。ロビーのソファ席で待っていてくれた彼女にミルクティーに入れても美味しいよ、と渡すと、丁寧に匙を出して薄茶色の液体を掻き混ぜ、そつとカップを両手で持って口につける。

まるでその光景は、絵画になってもおかしくないような情景だった。こういう風景を残したくて人は筆やカメラを手にするのもかもしれないと思わせるほどの。

「……セリちゃんは、どうしてARCSの試験運用に参加したの？」

静かなお茶会の中で、ぼつり、ティーカップに視線を落としたトワがそうこぼした。
どうして。

「一言で言えば面白そうだったからだけ……」

「けど？」

ぼんやりと薄明かりに照らされたトワの瞳は、不思議そうな色をたたえて私を見上げてくる。別に自分の心の内をさらけ出すような間柄ではまだ特にないけれど、なんとなく、話してもいいかなと思っただけのも事実で。

こくり、と紅茶を飲んで喉を湿らせて、言葉が続けた。美味しい、は心をゆるませる。

「正直なところ高等学校って土地によっては贅沢なことだね。私は……その、両親がいないから、学校へ通いたいって言いづらかったけどここなら奨学生制度があったし、自分が生きるための術を学べるかなって思って来たんだ。そしてARCSって戦術オーブメントはきつとこれからの礎になる。それを先に知っていられるってのは、いいアドバンテージになるから日照りに雨だった、ってというのが、一つ目」

自分語りすぎただろうか、とちらり反応を確認してみると、トワは思っていた以上に真剣に話を聞いてくれていて、すこし恥ずかしくなってしまった。自分にはない真っ直ぐさを目の当たりにさせられているというか。

「二つ目は……まあ、自分が偵察した結果を受け入れてくれるチームっていうのが、なんとか、楽しかったんだよね」

故郷はトリストタに比べればだいぶ田舎ではあるけれど、辺境というほどではなかった。とはいえず子供がたくさんいたというわけでもなく、同年の人がおらず一歳二歳上のクラスの人と通うということも当たり前だった。森に入って遊んだり、魔獣との戦闘も勝手にしたりして、退屈はなかったと思う。それでも、今考えればあれらは単なる遊びに過ぎなかったのだろう。

「誰かときちんとチームを組んで、お互いの戦技を信頼して、進んでいく。きっとこれから当たり前になるかもしれないけれど、あの時の私にはちよつとだけ輝いて見えた。探索中に提案してくれる作戦も納得できる物ばかりだったしね。命を預けるのは気持ちよかったよ」

これは嘘偽りがない気持ちだ。たとえ彼女が自分の選出に疑問を持っていたとしても。

「まー、そうは言っても最後は失敗しちゃったけどさ」

「そんな。みんな気が付かなかったんだよ」

フォローを入れるように即座に言葉が飛んできて、ありがとう、と感謝を述べる。

「でも自分からチームの斥候だっていうなら、私こそは気が付かなければいけないかった。そう思うから、あの気配はもう間違えないよ」

暗黒時代の魔導の産物、石の守護者。今まで接敵したことがなかった、だなんてチームを窮地に陥れていい言い訳にはならない。きつと本当にやばくなったらサラ教官たちが割って入ってくる手筈だったのかもしれないけれど、そんな考えがこれから始まる運用テストで通じるとは思えない。過酷な状況でこそ戦術リンクが活きてくるのだろうから。

「セリちゃんは……凄いね」

「私が凄く見えるなら、それはトワにないものを持つてただけだよ。私からしたらトワの方が凄く見えるから」

後ろから戦場を見渡して、可能であれば自分で弱点を看破し、発動させた導力魔法の威力を的確に増幅させる。そして、誰より何より、彼女の俯瞰視点というのはみんなに信用されている。過去の積み重ねで言葉が力を持つ。それは紛れもない彼女の能力だというのに。

「わがままを言ってもいいなら、初回ぐらいまではとりあえずチームを組んでいたいかなあ」

「……」

びくり、とトワの肩が動いたの見える。やっぱり。

「ARCS試験運用に自分が選ばれたことに納得いつてない、つて顔ずつとしてるよ」

カップを置いて、頬杖をつきつつ空いた手で自分の眉間を叩くと、トワははっとしてから表情を曇らせる。きつと私以外も気が付いているだろうけれど。まあ、友人だから踏み込めないってことはあるだろう。それにログナー嬢……アンゼリカは第一寮だし、他二人は男性陣だ。それなりに一番近いのが私だったってだけ。

「……わかる？」

「うん。私もおなじだし」

「そうなの？」

「いやー、だって新入生トップレベルの戦闘技能持つてる二人と、三高弟の愛弟子と、学院切つての才女のチームに放り込まれたんだよ？ さすがに劣等感持つって」

畳んでいた指を開きながら箇条上げて改めてちよつと、うっ、となつたけれどその気持ちは即座に飲み込んだ。

「でも、セリちゃんは偵察ができる、し、書類仕事が少し出来るだけの私なんかよりずっと」

「うん。そうそう、それぞれ」

「またもや疑問符が飛んでくる。」

「私たちが出来ることを、トワは引き受けなくていいんだよ。全員でチームなんだから」

「そうなのだ。私が出来ることを、他の人が出来たらいいけれど、それはオマケで、保険で、出

来なければならぬわけではない、そんな程度の話なのだ。

「だから、トワは私たちが出来ないことを引き受けてくれたら助かるんだ。さしあたってはきつとあるだろうレポートの添削とか、もしかしたら学生という権利で以て何かと闘うことになるかもしれないし」

何が起きるかわからないから、出来ることが全く別な人がいてくれるというのは大層心強い。「だからさ、とりあえず、初回まではやってみようよ。それでやっぱり駄目そうならその時は一緒にサラ教官のところへ直談判しに行くし」

すっかり冷めてしまった紅茶を流し込んでソーサーに置くと、そうだね、と彼女はなんとか笑ってくれた。本当に納得してくれたのかどうかはわからないけれど、私に言えることはもうこれだけだ。願わくは、このまま続いてくれたらいいのだけれど。

……それにしても、本当に、あの妙な気配はトワを間違えただけなんだろうか、なんて詮ないことを考えつつ、私たちは食器の片付けを始めた。

また明日が来る。

「さて、待ちに待った課外活動の詳細を発表するわよ」

全員クラスが異なるので、こうして放課後にミーティングルームへ召集されるのが当たり前になるのだろう。サラ教官から渡された資料に目を通すと、どうやらトリスタを南下したところにあるトラヴィス湖畔にある町、ラントで課外活動をするらしい。……ん？

「日程は25日の放課後に出発して、徒歩で移動ね。町に着いたらそのまま宿場で就寝して、本格活動は26日を予定しているわ。活動内容自体は向こうと傾向を話してはいるけれど、具体的なことに関しては一任しているから、向こうで依頼を受け取るように。はい、何か質問は？」

「すみません、これ公欠扱いですか？」

4月の自由行動日は昨日のため、日曜日といえども昼までの授業が入っているはずだ。

「公欠扱いよ。ただし、赤点取られるとあたしがハイシリッヒ教頭に怒られるんだから、6月の中間はきっちり点数取ってね」

「ってことは特例とか加算はねえのか〜」

「あるわけないじゃない。学生の自分は勉強よ」

クロウが勢いよく顔を覆って嘆いたところで、バツサリ切り捨てられて更に屍になっている。

うーん、授業のある日にも容赦なく課外活動が入ってくるなら、クラスの人にノート見せてもらう約束しておいた方がいいかな。あと予習復習もきっちりやっておかないと絶対ひどい目に遭う。やることたくさんすぎる。

「それじゃ、ルートとかも自分たちで模索していいからあとよろしく」

忙しいのかなんなのか、サラ教官はそのままミーティングルームを飛び出して行ってしまい、後にはなにがなんだかという五人だけが残ってしまった。

「とりあえずこれは図書館で地図を借りてくるべきかな？」

「だね」

アンゼリカの提案に全員で頷きつつ、図書館へ行くトワ・アンゼリカ組と、話すために食堂の席を確保しておくクロウ・ジョルジュ・私組で分かれて外へ出た。

「それにしても行き帰り徒歩っつーのは予想だにしてなかったな」

「はは、僕も鉄道圏内かなと勝手に思ってたよ」

「まあ戦闘回数が増えるなら街道行かせるのもやぶさかではないって感じなのでは」

あとは公欠になるとはいえクラス単位ではないので予算が下りないという推測も立てられるけれど。まあでもそこそこ手がかかっている端末の試験運用だしそこまで予算練りが苦しいってこともなからうので、近場の宿場町で都合の良いところがラントだったってだけかもしれない。

……ケルディックやリーブスでもよかったんじゃないかなあとちょっと思うけれど。

「つと、おお、あっち空いてんな」

食堂に入ってみると放課後だというのに学生が普段より少し多く、机あるかなと不安になったところで背の高いクロウが奥の方を指差した。

「その身長便利だねえ」

「まあな」

一人でいる学生から椅子を借りて五人座れるように調整して座ったところで、図書館組が気になつてきた。

「トワ大丈夫かなあ」

「何か心配事でも？」

「いや、アンゼリカに絡まれていないか心配で」

とはいえ、彼女は私よりあの接触を嫌がってはいないみたいなので、こうして心配することは過干渉かもしれないのだけれど。

「あー、お前ってアイツの抱きつき執拗に避けてるもんな」

「わからないではないけれどね」

「……バレてる？」

「モロバレだろ」

バレてるかあ、とため息をついて机に肘をついて顔を覆ってしまったけれど許してほしい。
「でもトワに手を取られるのは別に気にしてないよね」

「まあね。……っと、二人が入ってきた」

入り口の方へ向けていた視界の中に影が二つ入ってきたので、おーい、と手を振ったところではたと気がついた。クロウと私でジョルジュを挟んだ形で座っているので、うっかりすると私の隣に彼女が来てしまうのではなからうか。

「おお、こうして座れるってことは両手に花で話し合いが出来るってわけだ！」

案の定私の隣に座ってきて、ぎゅっと、トワと私を抱きしめるアンゼリカに一瞬体が強張りはしたけれど、モロバレだと言われた声が脳裏を過ぎってまあいいかという気分にな若干させられた。貴族というのは自分の権力に鈍感なものだ。偏見だけだ。

「……今日は逃げないのかい？」

やはりクロウやジョルジュの言うとおりにバレていたらしい。

「まあ、そろそろ恥ずかしくはなくなっただけで」

「そうか、嬉しいな」

ということにしておこう。クロウが妙に怪訝そうな顔をしていたけれど、見なかったことにした。いいんだ。これで。

「ARCSの試験運用だから、戦術リンクの組み合わせは回していききたいかな」

「じゃあマトリクス作っておいて数戦ごとに切り替えていく？」

「それ誰が回数記録つけんだ」

「バックアップに一人回ることになるわけだし、それがやればいいんじゃないか？」

「アンの意見採用でいいと思う」

何を目的とした課外活動なのか、それをハッキリさせておこうと言うことになり、とりあえず基本の機能をきちんと把握しようという話が出た。

旧校舎……校舎の体を成していないけれど旧校舎で、戦術オーブメントとしての機能は使ったけれど、その戦術リンクと呼ばれるものに関しては完全に意識の外にあったせいであまり使えなかった、というのが全員の見解一致となった。最後の総攻撃だけは「繋がった」ような感覚もあったけれど。

「サラ教官はβ版って言っていたけれど、その戦術リンクが不安定とかなのかな」

自分の掌よりは大きい端末を開いて、回路を眺めてみる。4LINE。前衛特化回路だ。他の

四人は2LINEや3LINEなので、少し羨ましい。基本は個人に合わせた作りになっているので羨んでも仕方がないのだけれど。

「まだ本人の資質依存度が高いと言っていたし、そもそも一年生の適性者がこの五人だけだったならそれを広げるっていうのも目標の一つだろうね」

ジョルジュが技術者観点で試験運用について語ってくれて、なるほど、と肯く。

まあある程度面子を考慮した的な発言もあったので、得意武器や戦術以外にも貴族平民のなかでもお互いに組んで問題ない背景を考慮した、というのもありそうだけれど。

「ある程度レポートの焦点はまとまったし、当日の道のりについて話そっか」
トワの提案に全員異存ナシでそのまままた話は進んでいった。

一二〇三年四月二十五日（土）

ラント——帝都の南東、トリスタの真南にあるトラヴィス湖のほとりにある小さな宿場町だ。クロイツェン州と都州の境に位置し、西ケルディック街道に接続している北ラント街道だけが基本的な経路となっている。古くより馬車道であったが、昨今は業者の導力車などが行き交う光景がよく見られる。

また、交通量が減ったとはいえエベル湖のあるレグラムや旧都セントアークへの街道とも接続していることから街道としては交通の要衝とも言われており、今でもそれなりの導力車の通行は確認されている。とはいえ鉄道網からは若干外れているため、ケルディックやトリスタへ出ていく者もそれなりに見受けられる。

主な産業は湖で行われる漁業と、盆地における果樹栽培、そして果実酒づくり。人口としては四百人ほど。

「つていう土地みたい」

24日の学院の授業が終わり、トリスタから南下していく途中でとりあえず表面上さらった情報共有することにした。

順調にいくと徒歩で二時間ほどのようなので、夜が更ける前にはつけるだろうという見込みになっている。それなりの頻度で車が通っているだけあって、石畳とかが引かれていないにしろかなり均されてはいるので歩きやすい。そうはいつても、やはり手入れが行き届いていないところもあり魔獣避けの外灯も切れかかっていたり、少し外れたら直ぐに森になってしまうので気は抜けないのだけれど。

「ちゃんと下調べしてんのな、えらいえらい」

ぐしゃりぐしゃりとクロウに頭を撫でられて、ぐしゃぐしゃになる、と言いながらその手を外す。まあ戦闘が始まれば走って跳んでをするのでまた髪の毛はぼさぼさになったりするのだけれど、それとこれは全くの別物なので。

「トワ的に何か追加することあったりする？」

「んー、セリちゃんが言った通りラントは都州とクロイツェン州の境目にあるから、何かあった時にどちらの憲兵隊が動くかで最近ちよっと揉めてるみたいなんだよね。もちろん皇族の方への反乱と見做されないようアルバレア公も慎重ではあるみたいなんだけど」

なるほど。風俗について調べてはいたけれど、トワが補足してくれたような政治的観点からは特に調べていなかったな、と自分の穴を自覚させられた。ありがたいことだ。うん、トワの強みっていうのはアーツも正直頼もしいけれど、こういうところもだと思う。

「いくら大陸横断鉄道が走ったとはいえ、鉄道だけで輸送を賄えるほどではないからね。もしかしたらちよつとしたいざござくらいは遭遇するかも」

「まあ公も愚かではないだろうから、そこまで露骨に境界侵犯はしないさ」

ジョルジュやアンゼリカが懸念や安心材料を追加し、何が起きるやらと魔獣を撃退しながら進んでいく。車が通る道だけだと逆に徒歩の人間は襲いやすく見えるのか、思っていたより頻度が高く、番がくるくる回って後ろになってすこした回。

「何だか妙な気配がして後ろを振り向いた。けれども特に魔獣の姿も人の姿もなくて、なんだろうなと首を傾げてしまう。夜中の寮で感じたものとはまた違うし、嫌な感じとかではないのだけだ。」

「セリ、どうしたんだい？ 次は私と組む番じゃないかな」

「あー、ううん、何でもない。ありがとう」

そつとその違和感を断ち切って、私はまた前衛に復帰した。

「セリ！ 頼んだ！」

「任せましたっ」と

戦術リンクが体に馴染んで、追撃の瞬間が見えるようになってきた辺りで、アンゼリカが場から離脱した隙間を狙い踏み込んで致命傷を与え切る。どうやらそれで終わってくれたようで腰に剣を差した、ところ、背中に衝撃。あ。

「さっすがセリだ！ 可愛い君がトワとともにこのチームに参加してくれて私は嬉しいよ！」

ぎゅっと体を抱きしめられる。それはチームとしての親愛の行動なんだろう。わかっている。でも駄目だ。気を抜いて、しまった。言いようもない嫌悪感が背筋を突き抜ける。

瞬間、

バチン、と盛大な精神振動が体を駆け巡った。それは後ろにいた相手も同じだったようで、尻もちをつくような無様を見せることはなかったけれど、たたらを踏みながら私から距離を取る。

——戦術リンクの決裂。

「ご、めん」

謝っても、いくら戦術リンクとARCSを再起動しても、私とアンゼリカのそれが再接続することは、道中なかった。

(自分が気にしているだけかもしれないけれど) チーム内の空気が若干重いまま、予定より早い形でラントに到着する。土曜日の夜へ差し掛かった時間帯なだけあって、思っていたより人通りが多い。

取り敢えず一枚撮っておこう。ぱしゃり。

「ええと、宿場はすこし外れにある、羽飾りの果実亭”ってところみたい」

「取り敢えずそこへ向かうとしようか。三人ともそれでいいかい？」

月曜に渡された資料を見ながらトワが先導し、ジョルジュが確認をしてくる。別に反対する理由はないので頷いておいた。

……戦術リンクの決裂。原因はわかっている。どう考えたって自分の方にある。でもそれは自分の力だけではどうにも出来ないの、ああ面倒だなあ、なんて感じてしまったのだ。どうでもいいことであるわけではないけれど、自分で解決ができない物事というのは得てして面倒くさい。中央通りからすこし脇道へ入ったところで件の宿場を無事見つけ、からんからん、とドアベルを鳴らしながら入店する。と。

「あ、ようやく来たわね」

「サラ教官!？」

そう驚いたのは誰の声だったのか。

トリスタで私たちを見送った教官が、既に寛いだ状態で宿場にいるのはどういうマジックか。確かに何度か導力車は通って行ったけれど、その中にサラ教官はいなかった筈だ。

驚く私たちを尻目に教官はラントの名産だという果実酒をおかわりしている。

「……あつ」

そこで私は道中にあつた“妙な気配”を思い出す。

「まさか私が後ろに下がっていた時にあつた気配って」

「そ、あたしよ。感知範囲内にちょーつと入ってみたんだけどちゃんと警戒したんだからよくやったもんよ。まあ具体的に“誰”かはわからなかったみたいだけど」

「……」

いや、森に囲われた道の後方30アージュで殺気も特にない気配を感じ取り切れっていうのは無茶な気がする。そこに割く労力は必要なのかと。思わずすこし脱力して膝に手をつけてしまった。深いため息をついても怒らないで欲しい。

つまり、サラ教官は私の感知能力を試した上で、そのまま森をぐるりと遠回りする形で抜けて私たちを追い越しラントでお酒を飲んでいた、ということだ。

「サラ教官、あんまりセリちゃんいじらないで下さい」

「あは、ごめんごめん。でも大事なことよ」

教官の言葉が、じくりと心にのしかかる。そう。斥候はチームの生命線だ。可能不可能であれば、可能であるほうがいいに決まっている。瞬間的に索敵を伸ばせて確定できるならそれにこしたことはない。——悔しい。

「戦術リンクの課題も多少見えたみたいだし、頑張んなさいよ」

「……」

どうやら教官はそれ以上話すつもりはないようで、まあいいかと全員言外の納得をし、女将さんに身分と宿泊の旨を伝えると「待っていたよ」と二階の奥部屋に通された。五人部屋に。

「……宿場町だからまあ、うん、私たちが二部屋借りるよりは、いいのかなあ」

「いや、さすがにトワとセリの寝姿を見る機会を男共に与えるのは容赦出来ないが」

「ま、士官学院だし今後こういうことも増えるのでは」

「いや、さすがに僕たちは気後れしちゃうかな」

「オレは別に構やしないぜ」

全員はちゃめच्याに言い合うけれど、逆に全員部屋にいる場合は妙なことはしづらいだろうと思うので、個人的にあまり反対する気は起きなかった。アンゼリカと一対一になる可能性が極力低いほうがいいというのもあるけれど。

というかこういう時に困るのは大概男性陣なのだろうが。良識がある限り。

「とりあえず、着替えは私たちと君らで部屋を交互に使い合うことに反対はないね？」

アンゼリカの確認に、面倒ごととはごめんだと言わんばかりの表情で全員が肯いた。いやどう考えてもこの狭いコミュニティでそういうことやりたくはないだろうと。やるなら後腐れがない相手のほうがまだいい。理解が出来る。してもいいとは思わないけれど。

そんなことを考えていたら、ぐう、とお腹が鳴った。クロウとアンゼリカがこちらを向いたので、それなりに大きな音だったかなと恥ずかしくなる。ので自分から控えめに手をあげた。

「……ごめん、そろそろお腹空いた」

「授業終わってから歩き通しだったもんね、私もお腹空いちやっただ」

えへへ、とトワが自分のお腹をおさえるので、いい人だなあ、なんてじんわりしてしまう。

「ま、取り敢えず明日のことは明日考えるでいいだろ」

クロウがそうまとめて、五人でたとたと下の食堂へ降りていろいろ頼むことになった。人数が多いというメニューが頼めて美味しいなあと思ったのは内緒だ。

「あ、川魚の林檎煮、あまじょっぱくて美味しいね」

「こっちの香草焼きも旨いぞ」

「ケルディックが近いせいかパンの香りがすごくいい」

「可愛い子がご飯食べてる姿は心のアルバムに何枚でも収めたくなくなってしまっうね」

「はいはい、そういうのはほどほどにしておきなよ」

そんなこんなである程度和気藹々としながら、シャワーを浴びたり借りた寝巻きに着替えたり、特にハプニングもなく、夜が更けていった。

「眠れねえのか」

何となく目が覚めてしまって、宿場入口にあるウッドデッキ部分で手すりに肘を預けて夜風に当たっていたら、クロウが出てきたらしい。街中なのであまり警戒していなかったけれど、顔だけそちらへ向けると、相手は当たり前のように隣に来て手すりに背中をもたれて私を見下ろしてきた。

「眠れないというか、まあ、昼間の戦術リンクがどうしてもね」

明日はどうしよう、そもそも繋げるようになるのだろうか、なんて考えてしまっても仕方ないことじゃないだろうか。繋げない面子を、試験運用面子として稼働させることの是非もあるだろう。そうして抜けるとしたら、自分だ。元々仲がいい四人プラス自分という形になっているのだから、そうするのが合理的だろう。

「まあなるようになんだろ」

はは、とクロウは笑う。それは、すこし空虚で。別に笑いたくて笑っているわけではなくて、こういう場面だから笑って空気を軽くしようとしているような。うまく言語化出来ないけれど、今までもたびたびあったやつだ。

笑いたくなければ笑わなければいいのに、とは、さすがに今の自分には言えなかった。

一一〇三年四月二十六日（日） 朝

「はい、というわけでこれが試験運用課題らしい、です」

着替えも朝食も終わり、全員食堂の席につきながらトワが宿の女将さんから預かった封筒をすこし掲げて宣言する。

「試験運用に関するってことは大体、こう、荒事なのかな」

「まあ開いてみればわかるよ、たぶん」

疑問を呈したところでジョルジュがそういうので、まあそうか、と頷いて開封を待つ。封蝋されたものを開けて中に入った紙を全員で覗き込んでみると。

・北ラント街道に出現している焔あらしの討伐

・南トラヴィス古道の暴れ魔獣の解決（倒木街道封鎖の被害多発）

・湖畔林の謎の声の調査

※それぞれの出現地点などは未確定のため注意されたし。また、討伐の報告は町長へ。

「全部荒事だねえ」

「いや最後のは荒事と決まったわけじゃ」

「ジョルジュ、本当にそう思ってる？」

「……二割くらいは」

しかしいまだ朝8時とは言え、北から南へ徒歩で移動し場所を確定させて討伐し、場所が不明な声の調査をするとなればすこし時間が足りないかもしれないなあと思案する。なんせ明日も授業があると言うのに徒歩で帰ることも考慮しなければいけないので、少なくとも17時にはラントを出発したい。

疲労が蓄積した状態で街道を歩きながら魔獣をいなさなければならぬので、四月とはいえあまり遅い時間に出歩きたいとは思わない、というのは共通見解だろう。

「地図広げるね」

トワが学校から持ってきた近隣街道まで含めた写しの地図を広げ、場所の推定を開始する。

「北ラント街道というのは、昨日通ってきた道か。森ばかりかと思っただが」

「脇の方に窪地になった方へ降りる道とかあったろ。ああいうのじゃねえか」

「うん。ラントの畑があるのは町の周囲30から40セルジュで、徒歩圏内だけすこし広いね」

「南トラヴィスの方は初めて行く場所だから北より手間取りそうではあるよ」

「湖畔林の方はそもそも町の人に聞いてからでないかと難しそうだなあ」

いろいろと懸念事項などを出し合って、20分。宿屋の女将さんにラントにおける交通手段事情なども聞いてある程度の方針が定まった。

「じゃあ、北ラント街道の畑あらしはこのまま全員で向かって退治する。その後は、二班と町に残るバックアップのジョルジュ君に分かれて、情報収集、南トラヴィスで魔獣の位置確認と分析が終わったところで合流、討伐。そして湖畔林の方へシフトする……って形でいいかな」

畑あらしの討伐で往復二時間はみたい。それだけで即出立しても10時半。別行動を開始して、特定・討伐まで少なくとも昼までかかるとして、そこからお昼ご飯を食べて、湖畔林の具体的な調査は13時とかからになるだろう。残り四時間。徒歩でいくなら時間が足りないところだけれど。

「いいんじゃないか？ この面子だと馬に乗れるのが三人いるわけだしね」

「あんまり期待はすんなよ？」

「私は士官学院入るまではちよいちよい乗ってたから、たぶん大丈夫」

そう。アンゼリカはもちろんのことだけれど、クロウも乗れるらしい。そしてついでに私も。故郷の街は林業が盛んで、その分入り組んだ山にも入っていくためいまだに馬と暮らしているといても過言ではないのだ。ご多分に漏れず自分もそう生きてきていた。

つまり三手に分かれる際には町中で馬を借りようという話になったのだ。

「さ、そうと決まれば行動あるのみだ」

アンゼリカの言葉を合図にするようにみんな立ち上がり、宿の女将さんにお礼と挨拶をして北ラント街道へ向かうことにした。

……そういえば後で馬を借りるけれど、こういうのって経費で落ちるんだろうか。落ちるような気が全くないけれども。町の商店でセピス塊を換金しておいた方がいいかもなあ。

一晚経ったところで案の定アンゼリカと私の戦術リンクは再接続を果たせなかったので、とりあえず組めるところで回数をこなしていこうという話になった。

そうして脇道を探索しながら戦闘もしつつ一時間が経過しようというところで、果樹園を食い漁っている畑あらしの一群が見つかった。低木の影から大畑あらしの姿も確認出来たので、取り敢えずあれを倒すのが最優先として目標を定め、二手に分かれる。

「っし」

まずクロウが小石を投げ、畑あらしたちがこちらへ気が付いたところで挑発戦技を使用して意識をロククする。ある程度単純な生物の場合は私を攻撃したくて堪らなくなるわけで、この戦技はこういう時にも便利だ。そのまま畑から引き剥がすようにひた走り、戦技のかけ直しやクロウの小石投擲を経てポイントへ辿り着く。

「そろそろだね」

「ああ」

十分に畑から距離を取ったところでぐりりと身体を反転させて武器を構えて見せた。こちらが牙を剥いたことに気がついた魔獣は、人里で悪さをするからにそこそこ知能が回るらしく撤退の気配を見せたけれど、もう遅い。

「残念ながらこちらは通行止めさ」

「分析は済んでいるからね、トワ！」

「うん、ARCS駆動——フロストエッジ！」

氷の刃が畑あらしたちへ直撃し、それに合わせるように前衛三人で踏み込んでその凍結した体を砕いた。運よく凍結を免れた個体も追撃し、大畑あらしもこちらの数の暴力の前では携帯食料による体力増強虚しく、程なくしてその巨体を地面へ沈めることになる。

「ナイス」

後ろから射撃をしてくれていたクロウが手を掲げて近づいてきたので、いえーい、とハイタッチする。いや本当に隣にいて頼もしかった。小石の投擲も的確だったし、挟み撃ちに転じた時は背中を預ける安心感があったものだと。

「やっぱ最初は銃使わないで正解だったね」

「ああ」

銃の使用は畑に傷がつく可能性と、単純に魔獣が怯え逃げてしまふ懸念から誘い出しには不適当だと。予想通り武器を構えたところで、*“それ”*が何を意味しているのか彼らは理解をしていた。

「人里に降りてこなければ討伐しないでも良かったんだけどね」

魔獣が光となった場所へ黙祷を捧げていたのか、そつとトワが両手を解いてそう呟く。

「しかし仕方ないことさ。現実はどうして降りてきて、人に害を為してしまったんだから」

アンゼリカがその肩を優しく抱きしめて、慰める。

そう。力を持つ者がいる縄張りに入ってしまった、というただそれだけの話なのだ。それはそれとして畑の周りに何か設置をするなどの措置を取るといふ行動は必要だと思ふ。傲慢かもしれないけれど、自然の隣で生きるというのはそういう配慮まで含めてだ。

「現在……午前10時。探索してたからすこし時間かかりはしたけれど、ストレートに帰るなら10時半には帰れるかな」

ジョルジュがポケットに入れてるらしい懐中時計でそう時間を告げてくる。作業者だからあまり腕時計を使わないのだろう。厚手のグローブを着けたりもするし、さもありなん。私も手首のスナップのために腕時計は使わないから似たようなものだ。

町長殿に報告もしなければいけないし、それを除いたってまだまだやることも多いので黙祷も

ほどほどにしてその場を後にし、私たちは再びラントへ向かった。

「……本当にこの振り分けなのかい？」

町へ戻り町長殿へ報告をしたところ被害が結構甚大だったようで大層感謝され、その方のご厚意で馬を三頭借りられることに。馬宿に着いて馬を選んでもらったところでアンゼリカが地を這うような声でそう呟く。

「仕方ないじゃないか。私と君は現状戦術リンクが繋げないうえ、トワと私なら重さもそんなにないから馬の速度も出て偵察にはもってこいだし」

「理解はするんだが……せめてトワ、別れの前に抱きしめてもいいかい」

「アンちゃん、直ぐに会えるからね、大丈夫だよ」

ぼんぼん、と抱きついてきたアンゼリカの背中を撫でるトワは本当によく出来た人すぎて逆に心配になってしまうのだけれど、いやこれは口に出さなくていいことだなとすこし口元を押さええる。本人がいいと言っているのだし、いいのだろう。たぶん。おそらく。

「取り敢えず、オレとアンゼリカが湖畔林の方の探索、トワとセリが南の古道で暴れ魔獣の調査分析、ジョルジュがジャンクションの通信の中継地点となりつつ町で情報収集することで」

「オーケーオーケー」

全員のARCS識別番号はメモって端末の蓋の裏に貼り付けてある。かなり原始的ではあるけれど間違いないだろう。

「あとは進展があらうとなかろうと11時と11時半には通信、正午にはラントへ、だね」

「そうだね。きちんとお互いが今どうなっているのかの確認は大事だから」

アンゼリカがトワとの別行動を惜しんでいる間に、いろいろな確認を三人で終えていく。まあいざとなったらトワ一人を逃すぐらいは出来るだろう。というか、それはしななければならない。

「ま、あんまり気張りすぎんなよ」

ぼん、と軽く背中を叩かれて、クロウに連れていかれるアンゼリカという奇妙な形の二人を見送る。……まるで見透かされたような言葉で、ちくしょう、とすこし心の中で悪態をついてしまった。

「セリちゃん？」

「あ、ああ、ごめん。私たちも行くかうか」

私がクロウ……とまではいかなくともアンゼリカ並みに体格がよければトワを前に乗せて囲う形で馬に乗る選択肢もあったらうけれど、残念ながらそうではないので馬に挨拶をしたのち先に自分が乗って、トワの補助をして後ろに乗ってもらう。

「それじゃ二人とも気を付けて」

「うん、ジョルジュ君も情報収集お願いね」

「行ってきます」

ジョルジュの見送りを背中に受けながら、私たちは南トラヴィス古道へ馬を走らせた。久々に風を近く感じて気持ちがいい。

「ねえ、セリちゃん」

暫く林や丘に囲まれた道に沿って馬を速足で歩かせていると、背中からそんな声が聞こえてきた。

「どうかした？ 遅い？」

馬に慣れていないとのことなので駆足まで速度を上げると辛いかもということ、単純に暴れ魔獣を見逃す可能性を考えて速足にしていたのだけれど、そういう勝手な配慮は良くなかっただろうかとすこし手綱を握る手が強張ってしまった。

「ううん、そうじゃないの。この間、話を聞いてくれてありがとうって、言っただけだから」
ぎゅつと、腰に回っている手の力が強くなり、二人で紅茶を飲んだ夜のことか思い出された。

あの夜はすこしでもつついてしまうとこぼれてしまいそうな感情を、私が自分の我儘で堰き止めてしまったような気がしてすこし内心咎めていたのだけれど。

「何か参考になったならいいんだけど」

「なったよ。すごくすごく、助かった」

「……」

助かったと言ってくれるのなら、どうしてそんなに、無理をしたように気丈に振る舞うのだろう。私にはどうしてもそれが理解できず、沈黙してしまった。きっと気付かれたくないのだろうとも思ったし、何よりかける言葉が分からなくて。

「——あ」

前方に街道を横たわるようにした倒木が見えたので、馬の速度を緩めて止まる。これが依頼書に書いてあったものの一つだろう。トワに一言断ってから自分だけ馬から降り、倒木の根本を見ると赤い液体と灰色の毛らしきものが付着していた。

「ぶつかって倒した、のかな」

「うん、おそらく手配された魔獣のだろう毛と血がついてるしそうだと思う」

それなりに大きな木をこうまで見事に倒すというのは並大抵の動物に出来ることではないし、自分が傷ついてもそれを何度も成すというのは、どうにもすこし違和感がつきまとう。

「……この案件の背景、もう少し調べたいね」

トワももしかしたら似たようなことを考えているのかそう言うので、同意見だよ、と返しなが

らまた馬の背へ。倒木の向こうへ行くためには、馬をここに繋げておいて生身で行くという手もあるけれど、馬が食べられてしまう可能性を考えるとさすがに避けたい。迂回もうまくいかなない心配があるので、それならやることは一つ。

「トワ、倒木を飛び越すからもっと密着して、口は絶対に閉じておいて。舌噛むと危ないから」馬の首を撫でてやってから後ろへそう声をかけると、トワの体が強く強く身を寄せてくる。よし、とすこし下がったところで手綱と足で馬に意図を伝え、速度が瞬間的に上がり、軽い浮遊感を伴った強い衝撃とともに私たちは無事街道の向こうへと渡り終えた。

ぎゅっとしがみついてくれているトワの手をとんとんと叩いて、終わりを知らせる。

「もう大丈夫だよ」

「す、すごかった……」

初めての乗馬に、初めての障害物越えというのはなかなかハードな一日だなと思ったけれど、まあ大丈夫そうであつた良かったと頷くだけにしておいた。

そのまま手綱を手繰っているとき定時連絡の時間になり、トワが対応してくれるのを聞きながら、すこし森がざわめいたような。

そうして、すこし遠くで、何かが倒れるような音がする。

「あ、また」

道を進んでいくと倒木が街道を封鎖しており、周囲の気配をすこし掴んでから問題ないと判断して再度下馬する。さっきの倒木にあったのと似たような毛と、光を反射する赤い液体。

「……」

「ねえ、セリちゃん。その倒木、なんか変じゃない？」

馬に乗ったままでというのにそう指摘ができるトワはさすがだと思う。分析戦技を持っているというのは伊達じゃない。

「うん。ちよつと嫌な感じだね」

即離脱が出来るようにまず馬に乗り、辺りをもう一度見やる。

馬に乗ると平素より格段に視界が高くなるので、感覚が普段と異なるのは確かだ。けれど地面と繋がっているという強さが、周囲へのアンテナを強固なものに。そうしてそれは、「森」の警戒をすり抜けて違和感を教えてくれるのだ。

「……セリちゃん」

呟くトワが体を寄せてくる。

森の奥から感じる、殺気。いや、憎悪。これは二人でどうにかなるものじゃない。そもそも真正面から対峙していいものでもない。身体の芯の奥から恐怖が内臓へ噛み付いてくる。

そろり、そろり、と見えない相手を刺激しないよう馬を後退させる。こんな状態になって、私たちよりも危機察知能力は高いだろうにパニックにならないというのは、いい馬の証拠だ。あとできちんとご飯をたっぷりあげよう。差しあたってはこの状況から脱出をしなければいけないだけだ。

目の前の倒木に一瞬視線をやって、よし、と気合を入れた次の瞬間、手綱を引っ張り馬を反転させ足による腹への合図で駆足まで速度を上げる。馬もこの異様なものを感じ取っているのか暴れずにいてくれて、背中を睨めつけるような気配を感じながら私たちはその場を後にした。

「……っは、あ」

一本目の倒木のところまで戻ってきて、額の汗を袖で拭う。冷や汗と、単純な汗が混ざって、これ以上このまま走らせていると目に入って事故りかねないというレベルだった。まだすこし手が震えているような気がする。

「あれは、」

息を飲むようにトワが問いかけてきて、腰に回っている手を安心させるように片手で覆う。とはいえ私の震えも伝わってしまっているだろうけれど。

「たぶんシシ……猪だろうね」

付着した毛と血液の臭い、そしてあの巨大な気配からそう判断する。もしかしたら森の主かもしれないレベルの話だ。

「それと、二本目の倒木って、つい最近というか、ついさっきみたいな感じじゃなかった？」

「うん。ほぼ生木だったし、血液も乾いていなかったから一本目を飛び越した後聞こえた音の正体だと思う」

私たちをあれ以上踏み込ませないための、あからさまな境界線。

「だけど、あそこまでやるってことは、私たちのことが分かっているし、逆に入らなければ害を為すつもりはない、ってこと、なのかな……？」

「……わからない」

少なくとも人里に突貫するということではないと、思う。思うけれど魔獣の考えることなんてわかるわけがない。ただあれだけ策を巡らせられる魔獣なら、人里を襲ったって大したメリツトがないことぐらいはわかるだろう。よしんば町を壊滅に追い込めたとしても、討伐隊が組まれ逆に森焼きになる程度のことは理解出来る筈。

そもそも、このトラヴィス湖周辺は森とそれなりに仲良くやってきて町が発展している歴史がある。昨今はそんなことになるまで森に対して敬意のないことをしていたのだろうか、などいろいろと疑問が尽きない。

……いつそ、トワを町に返して、馬を置いて、一人で行くべきだろうか。森の中に身を隠せるならもう少し、深く。

そんなことを考えていたら、どん、と背中に衝撃がくる。言わずもがな、トワが私をつよくよく抱きしめてきたのだ。震える体と、伝わってくる通常より速い心臓の音。

「セリちゃん。それは、駄目だよ」

硬い静かな声。「何が」と彼女は言わなかったし、私も「何が」とは問わなかった。

「……そうだね」

それでも、私はそう言うしかなかったのだ。見透かされてしまったなあ。

それから二度目の定時連絡を行い、とりあえず私たちはラントへ戻ることにした。このまま二人で周囲探索しても埒があかないし、通信でなく顔を合わせた状態で他の三人の意見も聞きたいところだと思ったので。通信向こうの三人も異論はないようで、馬を預けてから「羽飾りの果実亭」へ向かった。馬宿のご主人にはすこし事情を説明し、自腹でチップも払って彼を労ってくれるように頼んだので大丈夫だと思いたい。

……それにしても、なんだかクロウとアンゼリカの様子がおかしかったような気がしたけれど、気のせいだろうか。

「周辺調査じゃなかったの!？」

早めに切り上げたおかげでジョルジュと先に合流し情報交換をしながら残りの二人の帰りを待っていたところで、宿場に入ってきた二つの人影を視認して真っ先にそんな声が出てしまった。

クロウの方は鼻血を乱暴に拭ったのか、顔のどこどころに血の痕が残っているし、袖捲りで露出する腕などにも打撃を加えられたような痣があちこちに見える。

アンゼリカの方は顔面こそそこそ綺麗なままだけれど、やはり頬にうっすら擦過傷があったり、白い制服の方も別行動前にはなかった盛大な泥跳ねがあったりしてうす汚れている。短い髪の毛もところどころ跳ねていてスマートさの欠片もない。

トワが直ぐに救急キットを宿場の女将さんに要請するので、同じように席を立った私は横の店員さんに濡れタオルと蒸しタオルを追加で頼んだ。いや、どうして、こうなっているのだろう。

入ってきた二人は直ぐに私たちを見つけて、座っていたジョルジュの横、つまり元々トワの席だった場所にクロウが座り、一つ空けてアンゼリカが座る。異様な空気の中で、トワと私は顔を見合わせながら間を埋めるように腰を下ろした。

「……取り敢えず、調査進捗報告兼ねてお昼でいいかな」

そう。馬を手繰っていてお腹が空いているのだ。それはまず間違いないのだけれど、この空気の中であんな間拔けな音は鳴らしたくない。二人とも声は出さなかったけれど頷いてはくれた

ので、適当に頼みつつ待つ間に素早く報告とあいなった。

ついでに救急キットもタオルも借りられたので、トワと私で二人の治療をしたと言うことも記しておきたい。どこかに。

「と言う感じで、私たちの方はセリちゃん曰く、暴れ猪がいるんだらうって話になったんだけど、すこし様子がおかしいから今度はみんなでもう一回見に行きたいかなって思ってます」

取り敢えずトワと私の報告は終えて、一段落。治療もおなじく。

「僕の方は湖畔林のどのあたりで謎の声が起きているのか、そもそも何なのかっていう目撃調査だね。幽霊の声だの何だのって話から始まって、幽霊の声に誘われて子供が拐われたって話も出てきたりしたけど、町長さんに聞いてみたらここ十年以上はそんな拐かしみたいなのは起きていないって裏が取れた。逆に何でそんな噂が発生したのか疑問に思ってたくらいかな。あと音の発生源については森の中だから詳しい場所の特定は口頭からだとなんか難しかったけど、おそらくこの辺って言うあたりはついたよ」

学院から写してきたのより、もう少し詳しい周辺地図を雑貨屋から手に入れたのかジョルジュが机に広げる。見るとトラヴィス湖を眼前にいたたくラントの北西あたりにバッテリーが集中していた。

「それを受けて私達が馬を駆って現地へ行ってみたんだが、見事に洞窟があつてね。こう、繁茂した草で隠れるようにはあつたけれど」

洞窟。そうなると下手人……下手魔獣がいない可能性も想定しておくべきだろう。特に向こう側へ抜けることができる洞窟などだと、条件が揃えば洞窟反響音が螺貝のように遠くへ聞こえてしまうこともままある。

「ただ斥候のセリもいねえからな、流石に中の調査はせずに戻ってきたってわけだ」

それは正しい判断だと思う。二人で洞窟に入るのは自殺行為だ。斥候も、背後警戒も、もし挟撃された際に対する戦力も、何もかもが足りない。

というか、(状況証拠的に)殴り合いをしただろうにも関わらず一応、チームに迷惑をかけるつもりはないようで安心した。いや、そこまで頭が回らない二人だとはもちろん考えてはいないけれど。

「……あれ、セリちゃん、これ」

トワが広げられた地図を見ながら呟き落とし、自分が持っていた地図をすこし広げて何か確認をする。どうやら後ろに乗りながらたまにメモを取っていたらしい。確認が終わったのか地図をしまったトワが指差した机の上の詳細地図。……ああ、本当だ。

「洞窟がある場所と、二本目の倒木、高低差があるけれど近いね」

倒木側の街道が崖のように切り立っているため現地にいとそうとは認識しづらいだろうけれど、こうして平面に落とし込んでしまえばとても理解がしやすい。

「これは……うん。先に洞窟の方を調べた方がいいかもしれない」

何か物理的な計算をしているのか、ジョルジュがそう提案した。

「洞窟がなんらかの要因で笛のような構造になり音が鳴っているとしたら、それは人間より聴覚範囲が広い周囲の動物たちへの影響が強い筈だ。もしかしたら」

暴れシシもそのせいなのかもしれない、と言外に意図が落ちる。

全然別個にあった話が繋がったような気配を感じて、しん、と机が静かになる。お昼時で宿場はそれなりに賑わっているというのに。

「……わかった、それじゃあ猪の方は保留にして、洞窟の方の調査を先にしよう」

トワのまともに四人とも頷き、タイミングよく運ばれてきたお昼に舌鼓を打ちながら午後への英気を養った。それはそれとして机の上の空気は多少重かったけれど。

「あっ」

そうして準備を整え、いざ件の洞窟へ向かおうというところで、町を出て少ししてから大切な懸念事項を思い出す。

先頭に立っていたのでみんなを振り返り、クロウとアンゼリカに視線をやると二人とも何を言われるのか理解したのか分かりやすく顔をしかめた。

「もしかしなくても、その二人の戦術リンク破綻してるよね」

A R C U S を取り出して戦術リンクを手動起動しても、同期された端末内であれば見える筈のリンクが二人の間には浮かび上がってこない。

「まあ私も決裂してるのを抱えてるからとやかくは言えないけど、危ないし、取り敢えずクロウはジョルジュと組んで、アンゼリカはトワでいい？」

「ああ、そうだね、無難な分け方だと思うよ」

「オレもそれでいい」

斥候なのでリンクが繋がっているメリットよりは一人で動ける方を取った提案をしたのだけれど、突っ込まれずに承諾され、それぞれ A R C U S を操作してリンクを接続し直す。それを見届けて私はまた周囲警戒しながら歩き始めた。それにしても魔獣、いないなあ。

「ここが例の洞窟？」

「おう」

私はもちろん、一番背が高いクロウでさえも立ったまま入れるだろう洞窟が、封鎖もされず、

そこそこ人里に近いところにあるというのは奇妙な話だ。

入口近くで全員を停止させ膝をつき、地面に視線を落とす。残っている跡に手を翳しながら簡単な計測をして、自分の顔が歪んでいくのがわかる。藁の向こうは真っ暗闇で、空気が向こう側へ抜けている気配もない。そして中には小型……一般的な犬程度以上の生き物はいないこともうっすら気取れた。

「……」

洞窟の入口には複数種の獣の足跡と、巧妙に偽装されているけれど、人間の、足跡。それも複数人分。

仮に人間の足跡が古いものだとしても、ここまで出入りがあるというのに洞窟の入口が藁で覆われているというのは奇妙を通り越して不自然極まりない。いやな感じがするな、とぼんやり思った。

すると、ぼん、と肩を叩かれて見上げてみるとクロウが人差し指を口に当てながら、湖側へ行くこうともう片手でジェスチャーをする。なんとなく意図を理解して、先に歩き始めていた三人の後を黙ったまま追った。

「で、何が見えたんだ？」

その言葉から、私の沈黙からヤバいことを感じ取り洞窟から離れる選択をしたのだと驚いた。

自分の調査がそこまで信用されているということもそうだし、それを一人ではなく全員が疑わな
いでいてくれるということも。

それに気がついて、それを言語化出来てしまつて、ぎゅつと思わず両手を握り締めてしまふ。
だつてそうでもしないと、何だか目頭が熱くなつてしまふそうだったから。

「……洞窟の前に、動物の足跡と、人間の足跡が複数人分あつた」

あの凹み具合や靴の跡からして一般人というよりは、何らかの装備を持った人間であること。
古さからして洞窟内に潜伏している可能性は低いけれど、それなりに出入りがあるのにもかかわ
らず薦が繁茂しているのはおかしいということ。洞窟の中には現状何の獣もないこと。

自分が察知したことを一つ一つ説明していく。もしかしたらこれは単なる思い違いかもしれな
いけれど、私は、私を信じたいと思うのだ。みんなの命を最初に預かる者として。

「……」

単なる自然現象の中の案件だと思つていたものに人間が関わってくる可能性が上がり、四人と
も少し気難しい表情をする。それはそうだ。学生が対処できる問題なのかも怪しいということに
なる。

「サラ教官に一旦報告しよう」

トワが何か決めたかのようにそう言った。確かに。現状はまだわからないけれど、帝都区域憲

兵隊や領邦軍の介入が必要になる可能性だつて十分に考えられる。

既に通信番号を覚えていいのか、淀みなくトワは通信番号を打ち込んでコールする。自分たちも会話を聞くためにトワの A R C U S へ通信を接続し、程なくしてサラ教官の声が聞こえた。

『なるほどねえ』

ある程度省きはしたけれど、トワの的確な説明が一段落したところで教官が理解の言葉を落とす。

『それで、あんたたちはどうしたいの？』

どうしたい。問われて、そういえば考えていなかったなと思に至る。

『このままでと町長経由で憲兵隊に連絡して暴れ猪の方はそのまま討伐する、ってことになるわよ。あるいは、両方とも憲兵隊に任せるか、ね』

そう言われて、あの気配を思い出しそつとトワと視線が合う。あれに対峙するのもそうだし、もしかしたら人間のせいでああなっているかもしれない、と知った以上、ただ単純に討伐するところが正義ではないだろう、とも考えてしまった。

自分たちで討伐せず、憲兵隊に任せるでもなく、全く別の道を。

「私は、このまま見過ごすのは気分が良くないな」

今まで黙っていたアンゼリカがそう呟いた。その横顔は、良い意味で貴族然としていて、学院の女子が熱を上げてしまうのもなんとなく場違いにわかってしまう。なるほど。

「トワも、出来ることならその暴れシシを森に返したいんだらう？」

「……」

午前中にあつた討伐での出来事が脳裏をよぎる。そりやまあ、今まで街に住んでいた女の子が襲ってきたわけでもない生き物を討伐することに何ら思うところがないということも、ないか。ましてやまだ数時間前の話だ。

「ま、解決したいってんならオレも力を貸すぜ」

「もちろん僕もね」

二人がそう口々に意思表明をするので、自分も同意する。

トワは一瞬だけ俯いて、次に顔を上げたときは金糸雀のような色の瞳に、光が差し込んだような気がした。高潔な光。——嗚呼。きっと、誰も彼も、彼女のこの「色」に魅せられている。

「みんな……一緒に解決しよう」

『決まりね』

ことの成り行きを見守ってくれていた教官の言葉で、私たちはまた洞窟へと足を向けた。

「とは言っても、現状生き物の気配はないんだよね」

「それも妙だよな。こういう洞窟は何かの巣穴になったりしやすいだろうし」

洞窟を覗きながらも一度伝えたと、トワが疑問を提示してくる。まあ小さなネズミとか虫はいるかもしれないけれど、そう、本当に妙なのだ。

ARCSの便利機能として付いているライトを点灯させながら歩いていくと、10分もしないうちに最奥に行きついた。やっぱり向こう側に抜けていない。空気の通り道がない。そして。

「これは……導力器、かな」

ジョルジュが膝をつきながら、足元にあるラジオぐらいの大きさの機械に触れた。まだ稼働しているようで、何だかカリカリと気が落ち着かない音を出している。洞窟自体は天然ものなのだろうけれど、明らかに異質なものだ。

「トワ、顔色が悪くないかい？」

「う、ううん、平気だよ、アンちゃん。それより、あの地面の筒みたいなのなんだろう」

アンゼリカとトワのそんな会話が聞こえてきて、照らされた方向にある竹筒のようなものを視認して、パチリパチリとピースがハマっていく。――。

「ジョルジュ、その導力器って持ち出せそう!?」

「あ、ああ、うん！」

「じゃあとりあえず持ち出して全員洞窟から離脱！なるべく呼吸しないよう！アンゼリカはトワを支えてクロウは自分と前方警戒！」

閉鎖空間でも取り回しのしやすいダガーだけは腰から抜いて洞窟を疾走する。それで理解してくれたのかクロウも銃を構えながら後方直ぐのところまで並走し始めてくれた。歩いてもそんなになかった洞窟は、さすがに走ってしまえば直ぐに脱出出来るもので、警戒した入口にも何事もなく、そのまま視界が通る湖の方へ進路を取った。

「ごめん。失敗した」

唐突な撤退にに応じてくれた四人の呼吸が落ち着いたところで、私はそう謝罪する。

「な、何があったの？」

いまだにすこし顔色が悪く、アンゼリカに付き添われ座ったトワの疑問は尤もだ。

「……ガスが充満してた、だな」

私が口を開く前にクロウが解答を差し込んでくる。紅い瞳がそうだと聞いてくるので、黙ったまま頷いた。

「そう。たまに洞窟……鉱山とかでもあるんだけど、地中から出てきた天然ガスが溜まって、天然トラップみたいになっていることがあるんだ」

嫌な予感というのは当たってしまふもので。よくよく考えてみると『出て行った獣の足跡』があまりにも少なかつた。加えてトワは私たちの中では一番体躯が小さく、身長も低い。空気より重いガスの影響をモロに受けてしまったんだろう。金糸雀のような腫だからといって、そんな役割を押し付けるつもりはなかつた。

「なるほど、そういうことか」

さつき持つて出てもらつた導力器を検分していたジョルジュから、合点のいつた声上がる。

「これ、おそらくだけど獣を誘引する音を出す装置だ」

その言葉にすこし利き手が緊張したけれど、もう電源が切つてあるのか今はカリカリとした音は鳴っていない。

「それは、あの場所に動物を集めていた存在がいる、つてことだよね」

「そしてそれはおそらく人間だということか。面倒極まりない話になってきた」

もしあのガスが致死性でないのなら動物は洞窟の奥で弱り、蹲るだろう。そこを襲えば自分たちは傷付かず、獣を傷をつけずに生体を手に入れることができる。毛皮目的にしてはさすがに迂遠すぎるのでおそらく別の目的があると見るべきだ。それは今の状態だと何かわからないけれど。

「一旦町に戻らねえか？」

クロウはそう提案しながらも、崖の上へ視線をやっている。ああ、そうか。

「音の発生で気が立っていた可能性、だね」

「おう、そういうこった。ジョルジュのそれも回収するにしても荷物だしな」

そんなこんなで目的地も決まり、休憩も切り上げて動き出す。

腰のポーチに入れていた懐中時計を取り出してみると、針は15時を指していた。

トワの体調も考慮して、「羽飾りの果実亭」へ戻り、荷物を預けるとともに奥まった対面ソファ一席が空いていたのでそこを陣取ることに。ジョルジュ／クロウ、アンゼリカ／トワ／自分という無難な形で。

「ごめんね、みんな……」

「いや、そもそもガスに即気がつけていたらこんなことにはならなかったわけだし」

水を数杯飲んで落ち着いたのがグラスを両手で握りながらトワがそう謝罪を口にしたけれど、自分のミスによるものだということはハッキリさせておく。旧校舎から数えて二回目だ。

「まあとはいえ斥候任せるってのはチームの判断なんだしよ、そこまで一人思い詰めることもねーだろ。重症化もしてないっばいしな。これで降りるってのはナシだぜ」

「そうだね、クロウの言う通りだよ、セリ」

クロウとジョルジュにそう言われて、確かにまだ落ち込んじゃいられない、と自分の胸を軽く

叩いて息を吐き、気を落ち着かせた。

「うん、頑張るよ。ありがとう」

失敗は得てして先に来るものだ。それを恐れるのなら経験や書物や人から知識を得て、次に繋げるしかない。

「それにしても結局謎の声っていうのは一種の集団パニック扱いでいいのかな」

「僕はその線が高いと思ってるよ。あの洞窟に人を近付けさせないための噂を流した集団がいるんだろう。メモを改めて読み返すと、大体三ヶ月くらい前から始まっているみたいだし」

「それに尾鰭がついて人拐いのウワサまで出たってか」

「結局行方不明者はいないって話だし、そうなんだろうね」

もしかしたらあそこで意識不明に陥った獣の声が洞窟内から聴こえてきていた、という可能性もあるわけだし。まあバンシーとかの霊的存在じゃなくて良かったなあとは思っていたりする。

特にアンゼリカみたいな武器をほぼ介さない前衛がいる場合、敵性霊体への接触は精神汚染で何が起こるかわからないので本当によかった。

「取り敢えずこの後はその例の倒木の二本目まで確認しに行つて、どうするか、出たとこ勝負と
いうことになるのかな」

「アンちゃんの言う通り、それしかないかなあ」

「アレ」を知っている身としては再度あそこへ行くというだけで少し身が竦んでしまう思いだけれど、もしかしたらという思いがそれなりに強くもあるので複雑な心境だ。

「ああ、それについてなんだが、オレから提案ひとつ」

クロウが珍しく手を上げて発言するので、全員の視線が集まる。

「一人はバックアップに回すべきだろ」

バックアップ。主にこの状況で言うのなら、後衛の更に後ろ。前進後退を把握し、危険があれば離脱命令を即座に下せ、また壊滅した場合は教官へ知らせる役目になる。

「トワとセリが昼間に行つて、危険を感じて帰ってきたつてのには意味がある話だ。そこにもう一度顔を出そうつてんならそういう準備はしておいて然るべきじゃねえかって」

その場におらず、冷静に戦場を俯瞰出来る立場。確かに私たちは学生であり正規軍人の方のように精神熟達をしていない面子であるわけで、そういう役割を担う人材は必要かもしれない。ただそれを誰が、という話になるわけで。

「それなら」

「私がそれを担おう」

ジョルジュの声を遮って、アンゼリカが名乗りをあげた。

「四人中二人と戦術リンクが切れているのだから、私が後ろに回るのが適任だろうさ」

てつきりトワを物理的に守るために一緒に行くものだと思っただけで、そういう判断もするのかと驚いてしまった。いや、今日は驚きすぎだ。これじゃ自分が勝手に相手を決めつけていたといっているような……いや、実際そうなんだろう。

「いいのかい？」

「ああ。それに話に聞く限り暴れシシと万が一戦闘になったら、ジョルジュの方が戦闘面において役に立つだろう。君はいざって時に盾にもなれるのだからね」

つまり生半な防衛力では紙同然ということを言いたいのだと理解する。一理ある。

「だからこれは消極的な選択じゃなく、最善を考えた結果さ」

そう真っ直ぐ言い切る彼女は、ああ貴族なのだ、おそろしいほどに痛感した。

「私はそれに異論ないよ」

「そうだね、アンに考えがあるなら僕が前線に立とう」

「まったく、カッコつけやがって」

その信頼に今度こそ自分も過不足なく応えよう。

「私も少し話をしたのかな」

軽く手をあげて全員の注目を集め、それを確認して軽く咳払いをした。

「私は、今後全員が生還する道を絶対に諦めないって、今ここで空の女神エイドスに誓う」

自分を犠牲にすることは、策に上らせない。そんなのは残された側が困るだけだ。人間的にも、感情的にも。それでももしかしたら考えてしまうことはあるだろうけれど、採用はしない。女神に誓うことで自分の規範の外に置いておくことにした。

そんな私の突拍子もない言葉を、みんな真剣な眼差しで受け取ってくれる。きつとバレていたんだろう。何度か考えてしまっていたものを。トワやクロウには、特に。

「ああ、よろしく頼むよ」

アンゼリカが真っ先に拳を差し出してきて、私もそれに続き、全員の拳がそこへ集まった。

バックアップ通信を開始したままスピーカー機能もONにしたARCSを、太腿につけているポーチへ蓋が閉じないよう細工してから放り込んで私たちは二本目の倒木の前に来た。アンゼリカ自体は後方100アージュほどのところで馬をつれて待機している手筈だ。教官には通信が繋がらなかったのが宿に伝言を頼みただけれど、伝わっているかどうかは知らないし、正直アテにするものでもないだろう。

「……」

倒木の向こうから溢れ出ている気配は例の倒木を倒したであろう獣と同じではあったけれど、

あの時のような立っているだけで身が竦むような敵意は、なくなっている。

すう、と呼吸を整えてから制服の上着を脱ぎ、腰のベルトを外し、がちやりと片手剣とダガー、ついでに腰の後ろにつけているカメラポーチ、ARCUUSは抜き出してクロウに投げ渡してから端末ポーチもそつと下ろした。

その状態で一步前に出ると、トワも導力銃とARCUUSを地面に置いて私の横に立ってくれる。果たして。今までどうやって隠れていたのか、と疑問を持ちたくなるほどの街道幅殆どを占有する巨体かのそりと森の向こうから現れた。まるで、森が隠していたかのように。

シロガネのような毛をもつ猪。大きなまなこが私たちを見据えた。

唾液を飲み込むタイミングがトワと重なったような気がする。それでも、私は、私たちはこの森の主どのの前に立つと決めたのだ。そうしなければならぬと。そう。

もう一度深呼吸をする。

“森の主”に相對するには、恐怖ではいけない。憐憫でもいけない。ましてや威圧でもいけない。あつていいのは自然に對する敬意と正しい理解の上にある畏怖だ。

音はない。風も、鳥の声も、導力車の音も、湖面がさざめく音も、葉が擦れる音も、なにもかにも。だからか自分の鼓動の音がやけに大きく聞こえた。

見つめ合いは、幾ばく続いただろう。もしかしたら数秒かもしれないし、十数分以上かもしれない。それほどまでに圧縮された緊張は、巨猪の一步で物理的に踏み破られた。ただ歩くだけで振動が伝わってくるその行動は、ついに倒木の上へ乗り上げ、樹木をめきめきと破壊する。後ろの二人が警戒するのがわかり、防衛のために私もそうするべきかと利き手を緊張させ覚悟しかけた。

——けれど、トワは動かなかつたのだ。

そして踏み出した巨猪は、倒木よりこちらへは来ないまま数歩後退し、また、前へ出る。まるで地面を倒木を踏み均しているかのような、動きを。

それを眺め続けている程度終わったところで、巨猪は私たちなどまるで最初からいなかったかのように、何をするわけでもなく、森の奥へと帰っていった。

「……っ」

声にならない悲鳴とため息をもらしながらトワの体が傾くのが見え、下から入り込むように支えようとす。けれど、あたたかな体温とともに自分の体もそのまま落ちて。

「あれ……ご、ごめんね」

「いや、よく動かないでいられたね、トワにセリ」

「ああ、よくやったよくやった！」

つまり支えたとと言っても自分も崩れ落ちているようなもので、ジョルジュのやさしい声を聴き、髪の毛をぐしゃぐしゃするクロウにされるがまま、遠くから聞こえてくるアンゼリカの心配する声に、顔を見合わせたトワと一緒にただ笑っていた。

森の主である巨猪に、私たちの意図が伝わったのか確かめる術はない。

それでも、人間すべてが森の生き物に害を為そうとしているわけではない、という程度は伝わったのではなからうか。倒木を踏み越えて来た故に追いついた人間が、獣の悩みの種である装置を取り除き、武装を解除して進み出したことの意味を。そうだといいと、思う。

とはいえ獣がどうしてあんな面倒な形で集められていたのか、どこに連れて行かれたのか、どういった組織が行動しているのか、そういう人間的な側面は一切合切不明で、手がかりといえればジョルジュが回収してくれた導力器ぐらいなもの。

取り敢えず、巨猪が踏み潰した倒木の破片は全員である程度端に押しやって片付け、町に近い方の倒木は向かう際には残しておいたのでジョルジュに壊してもらった。そうして町長殿にもあらかたの顛末を（主にトワが）話したところで、私たちの今回の課外活動は一旦の終わりを見せたと言ってもいいだろう。

「はあい、お疲れさま」

五人で町長宅から出てきたところで、サラ教官がタイミングを見透かしたかのように立っている。いや、実際見透かしているんだろう。この人は。はっと気が付いてポーチから懐中時計を引き出すと、18時。そんなに明かりもないラントの夜は早く、陽もだいたい傾いて暗い。今からあの道を引き返すのか、とちよつと先疲れがやってきてしまう。

「初めての實習にしてはよく頑張ったじゃない」

「……まさか、かなり拗れてる案件だって知ってて渡しました？」

「いやいや、依頼内容は町に一任しているって言ったじゃない。そんなに信用ないかしら」

その言葉に、あるわけないだろう、という心の声が数人でハモったような気がした。

「まあそんなことはいいわ。取り敢えずこれからトリスタに帰って、そのままレポート仕上げてくれるとおねーさん助かるんだけどなあ」

「はあ!？」

「今から急いで帰って徒歩だと最速20時ですよ！」

「さ、サラ教官、さすがにそれは」

クロウの驚愕の声から始まり、温厚なジョルジュやトワの珍しい抗議の声が教官へ。

明日の準備だってあるし、予習もしたいし、可能ならばクラスの人からノートなどを借りて今日の授業の把握もしたいし、そもそも夕食だって食べたいのに。どこにそんな時間があるという

のだろうか。

「もー、士官学院生なんだからこの程度で文句言わないの」

いや、さすがに、言ってもいいのでは？

そんなことを思いながらどうやって教官を説得するか頭を巡らせていると、後ろの家からそつと玄関扉の開く音がした。結果を言うと福音だった。

「全く、町長のご厚意に甘えすぎよアンタたち」

とか言いながらちやつかり自分も送ってもらっているのだから抜け目ない。

現在18時23分。この時間なら余裕でキルシェは開いているし、ご飯は人が作ったのを食べられる。この状態で自炊したくないのはもう第二学生寮勢の言外の一致だと勝手に思っているけれどどうだろう。第一はよくわからない。

「いやでもまさかトラックの荷台で運ばれるというのは中々ない体験だった」

「だけど確かに全員運ぶにはいい案だったね」

貴族であるアンゼリカも、意外にジョルジュも、帝都住みだったトワも、何気にクロウも、トラックの荷台に乗ったことがなかったらしい。四人とも降りた時にお尻を押さえていたのはちょっと可愛かった。サラ教官はさすがに涼しい顔をしているけれど。

そう、あの後出てこられた町長殿に話を聞かれてしまったようで（いやまあ玄関出たすぐのところでも若干の大声で話していたこちらが十割悪いのだけれど）、よければトリスタまでお送りしましょうか、と提案してくださったのだ。そうして当初よりずっと早い時間帯に帰ってこられた、というわけだ。うん、導力車は、……いいものだ。

「取り敢えず、キルシエ行く人ー」

トリスタ駅の近くにある夜もやっている喫茶店の名前を出して拳手を募ると、1、2、3、4、5……5？

「って、何で教官まで手を挙げてるんですか」

「えー、いいじゃない。別に一緒にご飯食べようとかは思っちゃいないわよ」

それならいいですけど、と別に教官と食べるのが嫌なわけではないけれど、なんか、なんか、嫌な予感があるというか。いやまあいいのだけれど。

まあもうお腹の限界なので気にせずそろそろとキルシエに移動すると、時間帯のおかげか他の一年生もいて私たちのやつれ具合に何かを察したのかとても労ってくれたのは嬉しかった。いや本当に。持つべきものは友人である。そうしてご飯をたくさんたくさん食べて、結局もう覚えていた間にレポートを書いてしまおうと五人でわちゃわちゃしながら、戦術リンクのデータをまとめたり記録を出したり、トラヴィス湖とラント周辺の地図をレポート用紙に手描きしたり、そん

な阿鼻叫喚の中、レポートは着々と出来上がっていった。

「いやー、生徒の悲鳴の横で飲むお酒は美味しいわね」

「それが目的ですか鬼ー!!!」

たつぷりと時間を使い、店を出たのは22時だった。やばい。レポートはその場でサラ教官に提出して退店してきたわけだけれど、お酒を飲んでいる人に提出したものはきちんと受理されるのだろうか。まあでもいざとなったらフレッドさんや他の生徒が証人になってくれる。

はず。

そんなことを考えつつゆるゆる五人で他愛無い会話をしながら歩いて、学生寮の分岐点まで。

「また明日」

そう各々声をかけたりかけなかったり手を振ったり振らなかったりしたところで。

「セリ」

引き止められた。トワではなく、自分が。寮の方向へ向けかけていた爪先を戻してアンゼリカを眼前に捉えると、特に何も言わないので聞き間違いでも言い間違いでもないらしい。

「近いうちに時間をくれないか」

その真っ直ぐな瞳から、何を話したいのかわかってしまった。

ということは、つまり、自分が話さなければいけないことも自動的に確定してしまうわけで。

……この課外活動を経る前なら、自分はこうして呼び出されたとしても何かにつけ断っていたかもしれない。だけど。

「いいよ。明日の授業が終わったあと……16時ぐらいに旧校舎のところとかどう？」

「うん、それでいい。ありがとう」

私は私の意思で、個人として、アンゼリカに向き合いたいと、強く思ったのだ。

……思ったから、頑張れ、明日の自分。

一二〇三年四月二十七日(月) 夕方

授業も終わり、いろいろ覚悟も決めて、旧校舎に足を向ける。

技術棟の前を通り、入るだけでうっすら周りが暗くなったような気がする道を抜け、手入れされていらない樹木と落ち葉が軽く続く場所を通ると、アンゼリカはもうそこにいた。普段はすこしルーズだというのに、こんな時には遅刻をしない。

「来てくれてありがとう」

あからさまにほっとしたような気配を隠さないものだから、ああこういうところが人気の秘訣なのかな、いやどうだろう所謂王子様ムーブではないし見せないか、と考えてしまったり。現実逃避をしたいともいう。

私が彼女の前に立つと、真っ直ぐな視線が突き刺さる。

「端的に言おう。戦術リンクが決裂した時のことについて話がしたい」

うん。アンゼリカが私を呼ぶ理由なんてそれだけだろう。

「……たぶん、君にキツイ物言いをするようになると思うよ」

「構わない。何を言おうと、権力を振りかざし罰することはないと女神に誓おう」

それで引き下がるような相手ではないとさすがに理解しているというのに、こんな、言葉を。

わかってる。これは単なる引き延ばしで、何か意味のある時間稼ぎでもない、本当に生産性のない行為だった。

口の中に、唾液が溜まる。頭の中がぐるぐるして、平衡感覚が失われそうな気さえする。

私はすこし俯き、体の前で遊ばせていた両手を、握って。

「私は、正直に言うと、君がよくする行為について、好意的に見れていないんだ」

「……」

こういう話をする時、きつと真つ直ぐ相手を見た方がいいのかもしれない。誠意とやらを伝えるためには。それでも、私は……怖かったし、どうしても目が見られなくて彼女の黒い革靴の爪先だけを眺めていた。そこさえわかっていたら相手はどう動くのかわかるから。

「相手が肉体的に女性の際、その容姿をジャッジし、自分の好みであれば己のテリトリーに入れて、あまつさえ愛でるといふわけのわからない視点から相手の体に触ろうとする」

声は震えているのに、飛び出し始めた言葉は止まらない。

「……わた、しは、自分のこの顔が概ね好意的に見られる容姿だっていうのは流石にここまで生きていけば把握しているけれどそれでもそんなジャッジをされたくないし自分の体に触れられたくない。あなたのルッキズムに私を巻き込まないで欲しい。……それに、」

自分で続けておいて、言葉に詰まる。舌が乾いて、だのに冷や汗は背筋を通り、指先は冷たく

なる一方で。唇を一旦引きむすんで、奥歯を噛み締める。

自分の心の、やわらかい場所に、ふれなければならぬ。

それは本当に怖いことだ。恐ろしいことだ。ズタズタにされたら、当分抱えなければいけないのは自分なのだから。もしかしたら、下手したら、一生。

「……これは、八つ当たり、なん、だけれど、………貴族というのが、わたしはこわい」

幼い頃の記憶が高速で蘇る。

母が、父が、わたしに覆い被さって、暗闇をつくったことがある。その記憶以降、彼らがわたしの世界に生きて出てくることはなかった。ぼん、と、チェスの駒を取り除くように、消えてしまったのだ。それで、この話はおしまいになってしまう。

だからこれは、後から聞いた話だ。今お世話になっている父方の叔父叔母から。繁忙期も終わった冬の明け、春先に、久しぶりに休むことができた母と父と帝都へ三人で遊びに行った時、貴族が運転させる導力車が突っ込んできたらしい。それからわたしを守ろうとして二人は亡くなったのだと。そうして、その事件は、揉み消されたとも。叔父叔母もきつと頑張つてその証言を集めてくれたのだろう。それでも、この帝国で身分というのは絶対だ。いくらすこしお金があったとしても、敵に回せるものは限られている。

わたしの世界から、わたしのたいせつな人たちはいなくなったのに、世界は相変わらず回っていて、意味が分からなくて、どうしようもなくて。

「……」

もちろん、アンゼリカにそんなことは関係がない。わかっている。理解している。それでも。

『貴族だからその振る舞いが許されているわけではない』とは、完全には誰にも言えないだろう。貴族というのはいるだけで、*“力”*なのだ。たとえそれを相手に対して言語化などしていなくとも。事実、私は、問われるまで彼女の振る舞いを『力あるものの振る舞い』としていた。

「そう、か」

思いついた話などは特に語ってはいないけれど、私の様子と言葉で、何となく何かあったのか察したようだった。そう、察することができるとい、*“よくある”*話なのだ。それでもたとえどれだけ起きていたとしても私にとっては巻き戻せない一回だった。ただ、それだけ。

沈黙が落ちる。

結局私も何を言わねえのか、言いたいのか、わからない。ずっとあの頃から心はぐちゃぐちゃなままなんだ、と改めて突きつけられたような気がした。

「まず一つ」

しばらく考えていたのだらうアンゼリカの声が真っ直ぐ飛んでくる。私はいまだに顔をあげる
ことが出来ないで、ぎゅ、と自分の手の指先同士を絡めて掴んだ。

「話をしてくれて、ありがとう」

ありがとう——理解語彙ではあるけれど、浸透するのに、すこし時間がかかった。

「自分の行動を完全に变えるのは難しいが、君に対してそれを行わない、というのは私の裁量内
で確実に出来る約束だ。今まで不快な思いを、そして我慢させてしまったことを、申し訳なく思
うよ。すまない」

その誓いに、すこし、肩の力が抜けたような気がする。ああ、私は、ことここに至っても、彼
女が私に勝手に触れてくるのではないか、と警戒していたのだ。

「だが、関わらないというのは、無理だろう」

俯いたまま聞いていた言葉がそう続き、思わずすこし目を見開いて相手を見る。空色の瞳と視
線がかち合う。関わらない話に、どうしてなるのだろう。

けれど私の驚いた顔をとんでもないことを言い出した的な否定だと見たのか、珍しく一瞬視線
を横に滑らせて、口を開く。

「ARCU試験運用において、私はいま戦術リンクの決裂を二つ抱えている。そして君への影
響を考えると抜けるべきは私の方だ。けれどそれは」

「——アンゼリカ、それは、違うよ」

声は、震えずに出た。

「ARCSの戦術リンクは確かに画期的だけれど、それが繋がられる相手が限られるのも確かだ、リンクの破綻さえも有用なデータになる。私はそもそも君にこの課題から降りてもらいたくないなんて思っていないんだ。……その、いま驚いたのはそういう方向性の話になると予想してなくて面食らったというか」

ごめん、とフランクな謝罪が自然に口をついて。

「とにかく。これからも……いや、改めてこれから、よろしく、アン。でいいかな」

相手の利き手に合わせた手を出して、握手を求める。その手を見下ろして、一瞬、本当に一瞬だけ泣きそうな顔をした彼女は、だけど直ぐにその表情の形を潜めさせて、私の手を取ってくれた。

「ああ、よろしく、セリ」

——そうして、また、彼女との“繋がり”を把握する。

それはきっと戦術リンクを起動させた見た目としては何にも変わらないのだろうけれど、破綻する前よりもずっと上手くやれるような、そんな妙な確信があった。

「なあ、セリ」

「うん？」

握手を交わしてもう戻ろうとしたところで、またもや引き止められる。見えた笑顔はわりとんでもないことを言い出しそうな気がして、憚ることなくすこし渋面を作ってしまった。

「せつかくだしちちょっと確かめて行かないか、リンクを」

「え、まあ、うん、いいけど。街道にでも出る？ さすがに危なくない？」

とはいえ昼間だしまあ教官の誰かに声をかけてから出る分には問題ないだろうか。

「いやいや、実は旧校舎の窓の鍵をこの間入った時にちよろつと外しておいてね。何かに使えるかもと思って」

何かに使えるかも……深くは考えないでおこう。

とりあえず手招きされるままに藪をかき分けて旧校舎のサイドへ回り込み、すこし高いところにある窓へ取り付いたアンはそれと多少格闘して開ける。ダイレクトに埃が落ちてきて、ごぼ、と咳き込んでしまった。

見上げた窓は開いていて、人一人が通る分には何ら問題ない状態を示される。

「……わるいやつだな、君は」

「知っていてここを指定したんだとばかり」

「単に人が来ないところを選んだだけだよ」

「じゃあ入らないかい？」

「いや入るけどね」

友人とも言えない間柄の私たちかもしれないけれど、まあ、他でもない自分自身が楽しそうだと思つたし、何より本当に今直ぐにリンクを試してみたくて、私も旧校舎の中へ入り込んだ。

「そういえば、課外活動中にクロウと何かあつたのか聞いてもいいの？」

二人とも特に何も言わないし、別にそれで活動が困難になるほどの決裂を含んでいるわけではなかつたので活動中の追及はしなかつたけれどさすがに気になつてしまつた。

話をしながらアンに飛びかかろうとしていたコインビートルを蹴りで吹っ飛ばし腹を見せたところで切り刻み、アンはアンで私の後ろから来ていた飛び猫のキックを籠手で弾き返し掌底を。

「ああ、あれはあいつの空虚な笑いがカンに障つてね」

「あー」

思わず声が出た。

「何だ、やっぱりセリにも覚えがあるのか」

「覚えがあるというか、何というか、こういう場面だからこう返しておく、みたいなテンプレート的笑顔の時はあるなあって思つてたよ」

「そう、それだ」

靴についた魔獣の体液をすこし床で拭いながら、ダガーを持つ手の二の腕で汗を拭う。体液は別に拭わなくても魔獣と共に消えるのだけれど、まあ何となくだ。

「それで円滑に行く人間関係だと思われているのが腹立つ」

「あは、アンらしいね」

さっき見た真っ直ぐな瞳を思い出す。気になったら真正面から行く性分なんだろう。それがたとえ貴族という立場で育まれたものだとしても、気質としては間違いなく彼女のものだ。

「ま、気長にやっけて行こうよ」

クロウはもしかしたら実はこの五人の中で一番面倒な相手だったりするかもしれないけれど、どうせこれから共に課外活動をしていく仲には違いない。その中で、何かに触れられる機会もあるだろう。それを見逃さず、手練り寄せて、ぶつかって、そうして友人になれたらいいと、図々しくも考えてしまったのだ。

「もう！　ふたりとも！　本当に本当に心配したんだからね！」

そうして例の落とされた穴を起動して二人だけで旧校舎を踏破していたのだけれど、うっかりうっかり、時間が経つのを忘れてしまっていたようで。仲違いしていた（ように見える）私たちが揃って二人ともいないということを危惧したトワが探しに来てくれたらしい。場所の特定はジョルジュが通信波の強度を探ることでしたとかなんとか。通信機能を使わずとも凄いなあA R C U S。こわい。そしてクロウも何でか知らないけれどいる。

そして私たちは旧校舎のロビーで並んで正座をさせられ、トワの言葉を肅々と聞いているというわけだ。普段怒らない人が怒ったらとてもこわいという言葉の意味を噛みしめるしかない。

「……でも、本当に良かったあ」

ふにやり。空気が弛緩し、膝をついたトワが私たちをやさしく抱きしめてきた。思っていたよりも心を砕かせてしまったのかもしれない。頬にやわらかな髪の毛を感じつつ、その小さな肩に手を置いて、心配かけてごめんありがとう、と。

こうして私のはじめての課外活動は、本当の意味で終わりを見せてくれた。すごく疲れたけれど、でも、うん。この疲労感は悪くない。

1203年05月

ARCUS試験運用チーム
活動報告書

- 2 -

その瞳は
獣に似て

一人新聞部と意気込むのもいいけれど、今の自分に必要なのは実体験ではない斥候技術だろう、ということでは図書館に所蔵されている資料をこの間からずつとあさり続けている。

もちろん建物内外それぞれの索敵行動などのカリキュラムは予定されているのは知っているし、事前に配られているシラバスにどれくらいの時期に習うのかうつすら記載はされているけれど、六月。それでは遅いのだ。

開架されている資料はもちろんのこと、閉架資料にもアクセスがしなくて実技訓練担当であるナイトハルト教官と司書のキャロルさんの許可を頂いて書庫へ入らせてもらったりもした。

——ローランドさんですから問題ないとは思いますが、閉架書庫を移動させる際にはきちんと誰もいないことを確かめる、また柵の間に入る場合はストッパーを必ずかける、以上を徹底してくださいね。

そんな注意事項を毎回聞きながら、たまに柵の間に巣を作ろうとしているトマス教官を引きずったり、ハインリッヒ教頭に実技以外にもその熱意を向けたらどうだねと少し嫌味を言われてしまった（奨学生の成績は満たしているのだから放っておいてほしい）、担任であるフェルマ美術教官の大判書籍を運ぶのを手伝ったり、案外閉架書庫は話題に事欠かなかった。

今日はそういうことはなく、よさげな山野と都市それぞれの斥候専門書が見つかったので数冊借りて鞆の中にしまい外へ。天気もいのでキルシェのテラス席の軒先の影でのんびり読み進めようかと、珈琲を注文して腰を落ち着けた。

「おーっす」

ハンドサインの項目を読んでいると慣れた気配が近づいて来て、わしゃわしゃと髪の毛を巻き込んで頭を撫でられた。何度腕を退かしてもしてくるのだからそろそろ諦めも入る。

「うん」

一瞬だけ視線をやってから、直ぐに紙面に視線を落として反応すると、反応わりいなあ、なんてボヤきと共に斜め隣に座られた。今の時間帯は軒先と黄色いパラソルの下はともかく、私の対面である商店街の道に近い席は影もなく眩しいからそういう選択をしたのだろうけれど、それにしてもしこいいかぐらい聞くべきではなからうか。まあ、クロウにそんなことを言っても仕方ないのだろうけれど。

席に座るなら注文ぐらいして来なよ、と言うとすこし『そんならいいいだろ』みたいな視線が返って来たので、目を細めて首を振った。するとため息を吐きながら自分の荷物を置いて行くので、どうやらちゃんと注文をしに行くらしい。

「あ、ついでにブレンド頼んで来てー。ミルクつけて」

「あいよー」

すっかり冷めてしまった茶色の液体を飲み干し、ぱたんと本を閉じて膝に置き、クロウの対面席に置いてある鞆から財布を取り出し珈琲代をクロウの席の方へちゃらりと置いた。ちょうど小銭があつてよかつた。

「頼んで来たぜ」

「ありがとう、お代はそこに置いといた」

本を膝に抱えたまま後ろに背を預け、目を閉じる。

そよそよ。ライノの白い花はとうに散り、目の前にある公園では緑が盛りになっている。五月特有の、涼しいようなくすぐったいようなあたたかさの風を頬と耳で感じるのは楽しい。葉っぱがこすれる音に、すこし里心がついてしまいそうになる。

そつと目を開けて顔を上げると、何やら赤いカードのようなものを弄っているクロウが見えた。

「そういえば今度の模擬戦、V組VI組の合同だよね」

「げ、マジかよ」

先週の話も聴いていなかったのか。サラ教官ならともかくナイトハルト教官ならそれを言い忘れることもあるまいに、たぶん余所事を考えていたオチとかだろう。

「普段背中預けてる分、クロウとは戦いたくないなあ」

大きめの課外活動以外でも街道に魔獣が出たとかの届け出が学院へ舞い込み、それに私たち試験運用チームが駆り出されるということは、正直ちよいちよいある。便利屋扱いになっていないだろうか。……まあとにかく、そういった際に、私の戦闘時の挙動を見る時間が多いのはたぶんこの男なのだ。

あ、でもこれって普段仲良くしているから戦いたくない、みたいな意味に取られないだろうか。全然違うけれど。むしろ隙がバレバレだから戦いたく……いやむしろ戦うべきかな。指摘された。敵に指摘されるより、敵の顔をした味方が指摘してくれるならこれ以上ない話なのだし。

「そうか？ オレは戦いたいぜ」

前言撤回をしようとしたところで、にやり、と、お前の足を掬ってやると言わんばかりの笑みでそんなことを言われてしまい、なんだかすこしカチンと来た。宣戦布告と受け取っておこう。

差し当たって本でも読んでおこうか、とさっき閉じた膝のやつを机上に構えようとしたところで、机がコンコンと指先で叩かれた。顔をそちらに向けると、さっき弄っていたカードを扇のよっに見せられる。

「《ブレード》やらねえか？」

「……ブレード？」

聞いたことのない名称が出て来て首を傾げる。察するに、カードゲーム？

「ああ。オレもこの間知ったんだけどよ、これが中々戦略性のあるゲームでな」

戦略性。すこし気になって、膝に置いていた本を鞆の上に置いてカード束を受け取った。いろいろな武器の絵が描かれていて、左上と右下に数字が添えてある。どうやら武器ごとに強さ？が違うのだろう。そして束の後ろの方には雷を纏った刀や、鏡などのいかにも特殊っぽいものが。

「……手札から武器を出したりして、場にある戦闘力で競うの？」

「お、イイ線ついてるぜ」

そう言いながら素早く自分の荷物を置いていた対面に座り直し、鞆からずると緑色のプレイマットを出して来るものだから、もしかして最初からここでやるつもりだったのでは？、と疑問符が頭の上を巡る。まあいいか、とカードを使いながらルールを説明していくクロウの手元をぼんやりと眺めていた。

「つてことで、やろうぜ！」

「いいよ」

「よっしゃ」

本当に嬉しそうにガッツポーズをするクロウを、すこしかわいいと思ってしまった。時々ある空虚な笑いは一体なんなのかというほどに。それにしてもなかなか楽しく説明をしてくれたので、数回ぐらいは負けても勝っても付き合おうかな、なんて。説明の途中で届けられた珈琲を口に含みながらそんな風に考えた。

「手札で結構ランダム性が出てくるね」

「それをどう使うかってのが面白いんだよなあ」

「人によってファストで大数値を出したりとか、確かに分かれそう」

「そういうことだな。よっしゃ、行くぜ」

「あ、負けだ」

「カード配ったばっかだろ！ 諦めんなよ」

「いやいや本当本当」

「……手札がオールボルトミラーとか見たことねえぞ」

「こういうこともある」

「いやねえわ」

「うーん、それ困るね」

「まあ降参してもいいぜ」

「困るなあ」

「言いながらポルト三連チャンとかエグすぎねえか」

「私にこんな手を取らせた君が悪い」

そんな感じで、途中から街の子供もやって来て、大人げなくも真剣にやっている横顔を見たり喧騒を聞きながら、自分はお役御免らしいのでとりあえず戦況を眺めつつ本を読み進めることにした。まあ勝負を年齢を理由にして手を抜くのは相手にも自分にも失礼だからさもありなん。

「これからどーするよ」

「どうって、いつも通り寮に帰ってご飯作るよ」

陽も傾き、建物の影も濃く長くなった時間帯。子供たちも帰っていった。

だいぶ読み進められた本を閉じて鞆にしまい、お店にカップを戻そうと立ち上がったところで、カードの傷を確かめていたクロウがそんなことを問うて来た。

「ああ、お前自炊組か」

自炊組。まあそうなのかな。課外活動の帰りの日みたいなども疲れている時以外はあんまり外食はする気にならない。けれど寮生によっては学生会館の食堂へ行ったり、それこそキルシェに寄ったり、かなり人による。そういえばクロウを台所で見ることはあんまりないなと思った。

「じゃあね」

鞆を肩にかけ、空になったカップとミルクポットを手に店内の方へ。

ああそうだ。ブランドンさんのお店に寄って食材見て行こうかな。いくら一応巨大な冷蔵庫があると、言ってもあれだけ寮生がいると各自が使えるスペースなんて微々たるものだし、間違っただけで食べられてしまうこともある。

いつものようにドリーさんへカップを渡し（以前どっちが楽ですかと聞いたらどっちでもいいと言われたので好きにしている）、そのまま公園を挟んで向かいのブランドン商店へ。入ってみると、見慣れた人たちがそれなりにいる。一ヶ月で結構ここに寄る寮生も固定化されて来たなあ、なんて考えながらカウンターの前に置かれている看板の生鮮食料品の本日の値段を見た。

……鶏肉が安い。トマトも安い。すこし多めにトマト煮を一気に作って、今日明日のご飯にしてしまおうか。煮込み料理はたくさん作った方がいい。主食はご飯を炊いて突っ込んでリゾット風でもいいけれど、穀倉地帯ケルディックが近いおかげかトリススタはパンが結構安く手に入るのですこし悩んでしまう。ああでも最近魚食べてない気がするなあ。

「シチューとかどうよ」

「……」

店内に気配が入って来たかと思ったら、真横からそんな言葉が落ちてくる。見上げると今日は本当によく見た赤い瞳が私を見下ろして、にっ、と笑って来た。

「つーかお前本当に驚かねえなあ」

「隠す気もないわかってる気配にどう驚けっていうのさ。鶏肉のトマト煮でいい？」

「おう」

ため息を吐きながらカウンターに進んで、鶏肉とトマトとパン、その他あれこれを多めに買う。すると店主のブランドンさんが、あ、と何かに気が付いたかのように感嘆詞を落とした。

「あんたら新型導力器の試験運用チームだかなんだかに入ってる人だろ？ 魔獣退治とか助かってるからな、オマケ入れといたぜ」

「えっ、いいんですか、ありがとうございます」

「なんのなんの」

魔獣討伐はそれはそれで実技授業の加点になっているらしいのでそれだけでも別にいいのだけれど、こうして街の方に直接感謝されてしまうと、なんか、なんとというか、面映い。

照れながら会計をして紙袋に入れてもらった食材を手持とうとしたら、半分以上をクロウが

持つていく。まあ持つてくれるというならお言葉に甘えようと思う。いや、というかこの流れだと作るの私なんだし全部持つてくれてもいいのでは？

ほんのすこしだけ腑に落ちないものを感じながら、夕暮れの商店街をゆるゆる歩いていく。普段は隣にない影が一緒というのは、なんといか不思議な感じがした。

「というか普段別にご飯一緒に食べてるわけでもないのにどういう風の吹き回し？」

「んー。ま、なんとなくだな」

なんとなくで人の晩のメニューを決めないで欲しい。概ね決めかけてはいたけれど。

寮に着き、両手が塞がっているクロウの代わりに扉を開けて二人で台所へ進む。まだ夕食にはすこし早い時間だからか他に人はいない。台所のど真ん中にある大きな作業台に紙袋を乗せ、手を差し出した。

「折半」

「はいよ。……わり、300ミラしか入ってねえわ」

後ろポケットから長財布を取り出した相手は困った風に笑いながら、そう。

「つてえ！」

「あっ、ごめん」

思わず脇腹に平手が飛んでしまった。いや、君、財布の中がそんなことになってるなんてキルシエで注文した時にわかっていたことだろうに。明らかにそれ狙いじゃないか。しかしうっかり申し訳ないことに叩いてしまったけれどそんなことをしても仕方ないわけで。どうしよう、この食材。他の寮生に割安で譲るか、それとも大量に作って料理にしたところで譲るか。

取り敢えず手を洗って着替えてエプロンつけて下ごしらえを……。

ふと思いついたことに対してすこし逡巡し、ARCSを取り出して発信した。

二時間後。

「ただいまー。セリちゃん、なにか手伝うことある？」

「やあ、ご相伴にあずかりに来たよ」

「そんなわけで僕も」

「おかえりー。もう直ぐ出来るから寮生二人は先に着替えて来ていいよ」

トワに連絡をしたところちょうど三人とも一緒に居たようで、経緯を説明して夕食を一緒に食べないかと打診してみたのだ。アンが普段食事をしている第一寮の噂を聞く限り誘っていいものかどうか、とすこし悩みはしたけれど、嫌なら断るだろうと思っただけなら来た。

火にかけた鉄鍋に視線をやりながら、後ろ……貴族制服のアンへ声をかける。

「言っておくけどただの鶏肉のトマト煮だからね、アン」

「フフ、それが楽しみなんだよ」

多少野菜は多めに入れてとろかしてはいるけれど、家庭料理中の家庭料理だ。叔父さん叔母さんが森での指示だしとかでくたくたになつて帰つて来たときに、肉も野菜も一気にどつと取れるということでも重宝していた料理ともいう。

コトコトコトコト。五人分の煮込み料理はさすがに量が多い。でも煮込み料理、本当に量を一気に作った方が美味しく出来るんだよなあ。今回は時間かけられなかったけど、もしコンスタントに五人で食べられるなら大量作成が美味しいご飯をもっと作れるかもしれない。たとえば……カレーとか。これから暑くなる季節だし悪くない。うん。もし誰か得意な人がいたらそっちに任せるのもいい。

「で、そのクロウは？ 見当たらないけど」

「セリちゃん、何か手伝うことある？」

どうやらさつさと着替えて来てくれたようで、ジョルジュとトワも台所に入ってくる。食器出したり、焼いたパンをトースターから乗せて、と指示を出すと二人はさつと取りかかってくれた。

「ちなみにクロウは『金欠なら魔獣狩ってセピス稼ぐ？』って冗談言ったら出て行った」

「えっ、大丈夫かなあ」

「まあしかし、そうそう遅れは取らないだろうさ」

私もそう思う。死にかける前に離脱するぐらいの力はある。筈。たぶん。……いや大丈夫だよね？ そういえば出て行ってからしばらく経っているような気がしてすこし背筋が寒くなる。

「おーっす」

噂をすればなんとやら。玄関の方からいつもの気息そうな声が聞こえて来た。ほっとする。

鍋の中身もいい頃合いだ。器によそっていくと、アンがトワから渡されたらしいお盆に乗せて食堂の方へ運んでいく。たぶんパンも既にそっちの方へ行っているだろう。

エプロンを脱いでぐるぐるとまとめて食卓の方へ自分も向かう。

「お、いい匂いじゃねえか」

「クロウ君、ちゃんとお金は払わないと駄目だよ？」

「わーってるわーってる」

手を洗ってちゃっかりと食卓についているクロウに四人でため息をつきながら、冷める前にご飯にしようということを手を合わせた。いただきます。

「ん、美味しい！」

「ああ、かなりイケるぜ」

「かなり素材の味が強いけれど、これはこれでオツなものだ」

「ホツとする味だね」

口々に褒めてもらえて、良かったと胸を撫で下ろす。ありがとう叔父さん。私が料理を頑張りはじめた頃にこれは覚えておけ、これは自信ある、ってすごく丁寧に教えてくれて。おかげで今や得意料理です。

「よかった、西の味付けだから合わない人もいるかもと正直思ってた」

「セリちゃん西部の出なんだ」

「うん。林業が盛んなティルフィルっていう街で、綺麗なところだよ」

ティルフィルの人間は森と共に生きて、森に生かされてきた。林業だけでなく木造工芸品なども盛んで、石の扱いではバリアハートには及ばないけれど木工に関しては帝国随一の職人街も築かれている。

「えへへ、こうしてみんなでご飯食べるの楽しいねえ」

何のてらいも含みもない楽しそうな表情でトワがそんなことを言うので、そうだね、と私も自然に笑みと言葉が零れた。ちょっととした大きな家だったので、働き手の人とご飯を食べて賑やかだった夜を思い出す。

「可能ならまた集まりたいものだね」

「ああ、いいんじゃないかな。得意料理もそれぞれ違うだろうし」

「そうだね、みんなの料理食べてみたいかも」

「それなら課外活動で倒した魔獣から拾ったセピス塊とかを共同財布に入れて、そこから材料費を出すとかどうだろう」

「お、それいいな」

今のところ持て余していたセピス塊などの使い道を思いついて提案すると、クロウを筆頭にみんな同意してくれた。よしよし。じゃあ今回はそこから貰おう。クロウは命拾いをしたなあ。

「そういえばさつき、着替える前にトワの左腕に青い腕章があったけど」

話題が一段落したのでふと思いついた疑問を口にする。記憶違いじゃなければ、あれは生徒会の腕章じゃなかったろうか、と。もしかして。

「うん、生徒会に入ることにしたんだ」

「課外活動やりながら、生徒会？」

望みをかけながら平常を装って問うてみると、大きな瞳をすこし瞬かせて、相手は肯く。

「そうだよ」

「……勧誘されたからってそこまで茨の道を進まなくても」

「それは私たちも言ったのだけれどね」

課外活動と一緒に続けられるのは嬉しいけれど、人間、体が二つあるわけでも作れるわけでもないのに、とすこし心配になってしまう。それでも、トワは真っ直ぐ私を見つめて、にこりと静かに笑った。

「無茶かもしれないけど、どっちかしか選べないわけじゃなかったから」

「真面目かよ」

課外活動だけの道でもなく、生徒会だけの道でもなく、両方やる第三の道。

どこにそんなポテンシャルがあるのだろうかと思議になるけれど、それでも彼女の能力の高さは私たちが一番よく知っている。そしてそれをきつとやり遂げられるだろうことも。

「そっか、決めたんだね」

「うん」

あの夜のことを、あの馬の背のことを、思い出す。今はもう、揺らいでいた彼女の姿などどこにもない。なんだか妙にそれが嬉しかった。

それなら私は傍らで応援させてもらおう。この凸凹の仲間たちと一緒に。彼女の道を。

もらったオマケはキウイで、みんなで美味しく食べた。

「はい、これが今月の課外活動の詳細ね」

自由行動日も終わったしそろそろかなと思っていたら、すこし遅い日付でミーティングルームに呼ばれ、いつもの面子でサラ教官の楽しそうな表情を眺めることになった。何かあったんだろうか。まあいいか。

とりあえず渡されたレジユメに目を通すと、今度は打って変わって西のラマール州にあるグレンヴィル市。リーヴスとミルサンテのちょうど真ん中にある街だ。南にトリシュ川をいたたく田園風景が綺麗で、ミルサンテのガラ湖と並んでちょっとした観光資源になっているそれなりに大きい街のはず。

「往復はしやすいけど、向こうの市長さんが話したいことがあるみたいで今回も前日から出発を予定しているわ」

それじゃあね、とまた説明もそぞろにサラ教官は部屋を去っていく。こういう事態になるだろうと思っただけで来ていた帝都全土の地図を机に広げ、全員でそれを見下ろした。

「今回は鉄道沿線の街かあ」

「大陸横断鉄道本線で、帝都乗り換えてラマール行きに乗って総二時間ぐらい？」

「乗り換え含めてもそんならいなのか」

放課後すぐに出たら18時頃には到着出来るだろうか。まあラント到着と似たような感じだけれど、街道を歩いての二時間と鉄道乗り継ぎでの二時間はワケが違う。

「……これ鉄道のチケットも手配自分たち？」

基本の疑問を咄くと、全員一律で若干不安があるような顔をしてしまい、そういった事務的なことにおいてはサラ教官への信用がないというのがありありとわかる。

「さすがにお金は学校から出る……とおもう、けど……、うん」

「サラ教官よりマカロフ教官に聞いた方が良さげだね」

「なんだ、じゃあジョルジュが聞くのが早いじゃないか。兄弟子なんだろう？」

「そうなのか？」

「……まああの人からの無茶なオーダーに付き合わされてた同士ではあるかな」

この一ヶ月半でその温厚さがよくわかったあのジョルジュが、うんざりしたような表情を見せるというのは大層珍しいのではなからうか。G・シュミット博士、三高弟の一人であり今でも精力的に活動されている高名な研究者の方で、ゼムリア大陸で最も有名な人に数えられる。導力革命辺りの話は日曜学校でもやっていたし、たぶん。……まあ日曜学校が普及していない地域もあるのであまり言うともあれかもしれないけれど。

「なら確認するのは、チケット、風土、周辺地域の魔獣、出来れば地図、の四つかなあ」

「じゃあトワ以外で巻き取ればいいか。私が風土やるし」

「そうだね。じゃあ僕はチケットについて」

「ならオレは地図」

「一番簡単なのを持って行ったなクロウ。まあいい、魔獣を調べるさ」

流れるように、まるで打ち合わせでもしていたかのような速さで各々分担を決めていく。トワだけが、えっえっえっ、と狼狽しているのだけれど、まあたぶんみんな考えていることが似ているってことなんだろう。

「生徒会、忙しいんだろ？」

ぼん、と頭で弾ませるようにクロウがトワの頭を撫でる。そう。トワは本当に忙しくなっているのだ。生来の気質に加えて、生徒会故に見えるもの、生徒会故にやらなければならぬもの、権利があるからこそ出来るもの、そういったものが見えてしまい、そして見えたものを放つては置けない。それで最近帰りが遅いというのはもう全員承知している。

「あ……」

「大丈夫大丈夫、資料集めるぐらいさすがに出来るって」

そこまでトワに面倒を見てもらわないといけないというのは、同学年として情けない限りだ。

「うん、じゃあ、お願いしちゃうね」

誰かに寄りかかるのが苦手だろう彼女が、そう言ってくれる。個人的にはそれがすこし誇らしかったりするの、おかしなことだろうか。ううん、そうでもない、思う。

「私は麗しのトワのお願いならいくらでも聞く準備はできているけれどね」

「はいはい」

アンとジョルジュのいつものやりとりを見つつ、私たちはミーティングルームを後にしてそれぞれやるべきことに足を向けた。

「ミヒュトさん」

「帰れ」

図書館でグレンヴィル周辺について調べてから、トリスタ商店街の外れにある質屋に顔を出すと店主であるミヒュトさんは新聞を広げタバコを啜えたまますげないことを言い放った。

「開口一番に酷くないですか。……って、ジョルジュがいる」

確か教官室にマカロフ教官はいなかったみたいだけれど、見つかったんだだろうか。まあいいや。クロウならともかくジョルジュが疎かにしているとは全く思わないし。

「持ち込まれたラジオの修理を頼まれてね。セリは？」

「ミヒュトさん妙に物知りって話だから、今度行くグレンヴィル市で何か起きてるとか知らないかなと」

街の人から噂を聞いてちよいちよい立ち寄って何かを買ったり話を試みたりしているのだけれど、どうやらそろそろウザいらしく、わりとさっきのような応対をされることもままあったりする。客を追い返すのはどうかと思う。

「は？ グレンヴィルに行くのかお前ら」

けれど、思っていた以上の反応が返されて、二人で真顔に。

「それ、どういう意味ですか」

「あー、いや、用心して行けよ」

クッククック、と笑ったつきり、ミヒュトさんは黙ってしまった。ああこれはもう教えてもらえないかと判断して、ちよつと使いそうな消耗品でも適当に買って行こう、と柵を見たところで“それ”が目に入った。透明なケースに入った赤いカード。

「……」

「それ買ってくなら500ミラだぞ」

目線の先を敏く取られてしまい、一瞬悩んだところで、包んでくださいとお願いしてしまつた。なんの確信があるわけでもないけれど、たぶん、あいつが流したんだろうな、なんて。とは

いえ楽しかったのは事実なので、まあ気が向けば布教に力を貸すのもやぶさかじゃない。

ちやりんと500ミラを払い、適当な紙袋に入れられたカードを手にジョルジュと一緒に店を出た。夕方の、影が伸びる商店街をゆるゆると歩いていく。

「さっきの反応、気になるねえ、ジョルジュ」

「うん。他の三人にも共有しておきたいかな」

グレンヴィル。州の境というわけでもなく、現状政治的にそこまで不安定という感じでもなさそうだし、あれは本当にどういう反応だったんだろう。というか、やっぱりミヒュトさんってそっち系の仕事を生業にしている人だったりするのだろうか。確定事項でも言いふらすことでもないから口にはしないけれど。

「セリはこれから寮に？」

「うーん、そうしようかと思っただけど、端末室使えないかなあ」

「ああ、導力ネット」

「そうそう。まあでもそんなに繋がってる場所もないから手に入る情報もないかあ」

授業で使わせてもらっている端末室や導力ネットは技術の進歩の賜物だと思う。離れた場所にある情報を、取得できる。それも通信機よりずっと遠くまで。もちろん、それが偽証であるということも考えなければならぬけれど、とにかくにも、革命とも言っていないレベルのものだ。

「……技術棟の使うかい？」

「えっ、あるの」

「うん。ルーレにある工科大学とすこし連携したりしてるから、その関係で」

「じゃあ貸してもらおっかな」

ピアノをやっていたせいとか、端末のキーボードはあまり苦じゃなかったし。同級生にはまだキーボードを見ながら打っている人もいるので、大変だなと思う。それでもあれだけ高価な端末を生徒に触らせてくれるというのは、本当にいい学校なんだなとしみじみしてしまうほどだ。まあ戦争によって技術が発達するというのは世の常なのだろうけれど。軍事大国というのは、そういうことだ。

「そうだ、例の導力器、何かわかった？」

「構造解析はしたけど、さすがに市販で出回ってるものじゃない、つてくらいかな」

「フルスクラッチ？」

「というよりは、いろんなものをつなぎ合わせてだから応用系かな」

「そっか」

フルスクラッチなら逆にその技術の出所と流出を考えて、技術者の動きから何かわかったりするかもしれないと思ったけれど、応用系だと範囲が広すぎてさすがに絞り切れる気がしない。

「でも、ツギハギ部分がすこし雑だから、専門の技術者じゃないかもしれないね」

やっぱりジョルジュは私たちが見えているものとは全く異なる観点で物事を見られるので、本当にチームにとつて要だと思う。そういう点で、自分は何か担えているだろうか。……まああんまり気にしすぎても空回りするだけだし、斥候に関してはそれなりに頑張っていると思う。うん。でもまだまだというところも自覚しているので向上あるのみだ。

「わからないものはしょうがない、か」

「気にはなるけどね」

そんな風言いながら技術棟へ二人で向かい、端末でネットに潜っては見たけれど、結局『わからない』ということが分かっただけに終わってしまった。まあグレンヴィル自体がそういうネットが発達した場所ではないので、さもありなんのただけだ。

カメラポーチをロッカーに押し込んで、足の端末ケースと腰に乗る武器の重さだけを確かめながらグラウンドへ向かうと、珍しくクロウが遅刻もせずにそこにいてV組の面々と楽しそうに話していた。……あ、でもまだだ。アンゼリカに殴られたとはいえ、妙な笑顔は健在で、すこし次の課外活動が心配になってしまう。せめて目の前で殴り合ってくれたら止められるのだけれど。でもそれだと止めてほしくて喧嘩、という茶番になってしまうか。

階段を下りていくところで相手も気づいたのか、ぱちん、とウインクをされてとりあえず手を振っておいた。隣を歩いていたおなじクラスの人からは、あれクロウと知り合い？大丈夫？、と心配されてしまい、まあいいところもあるんだよ、とだけはフォローしておいた。駄目なところもあるけれど。

「今日はそれぞれにとって初めての相手と戦うことになる。とはいえ部活動で戦っている者、また共闘している者もいるだろう。それによる隙は思う存分突いて戦うといい」

整列した二組の生徒たちの前で、クリップボードを持ったナイトハルト教官が私たちを見据える。通常授業でも手を抜いたら即容赦なく《剛撃》の名に違わず叩き伏せてくるのだから、ここ

でも友人同士だからといって和気藹々行動をってしまったら容赦のない檄が飛んでくることだろう。うっかりすると物理的なものが。

挙げられた手に合わせ、ザツ、と全員揃って爪先を90度動かしV組とVI組が向き合った。この一ヶ月でだいぶ訓練されてきたと思う。

「なお、スリーマンセルで行うが、このクラスには一部戦術オブメントが異なる者もいるため、それも含めて対戦相手は考慮している」

言われて、対面に並ぶV組の後ろの方にいるクロウと視線が合った。あ、どうしよう。戦術リンク切断していない気がするから、ARCS起動したらうっかり敵同士でリンクが繋がってしまうかもしれない。そんなことが筒抜けているのかいないのか、にやりと笑ってきた相手にはすこしだけ目を眇めて対応しておいた。

「第一組は——」

「第三組！」

同級生たちの戦いを見ながら、あそこでなら自分はどうか動くだろう、なるほどそう動く、動ける、いろいろな勉強させて貰っていたところで、クロウの名前が呼ばれ、対戦相手として当たり前だけれど自分の名前も呼ばれた。

こちらの構成としては大剣・片手剣・導力銃でバランスがいい。向こうは重槌・双銃・短剣だろうか。クロウは短剣より前でありつつもやや後ろに位置しているとはいえ、フィジカルの強さから前へ突っ込んでくる可能性があるし、後衛にスイッチする臨機応変さも兼ね備えている。ただ戦い方を知っているからこそ警戒が引つ張られてしまいうけれど、情報を知らない相手は一番おそろしい。——戦術リンク、OFF。

逆手ダガーと片手剣を構え、横にいる大剣の同級生にアイコンタクトを。速攻で前衛を叩き潰す。ただしクロウが直接牽制してくるだろうからそこをどうやっていなすかだろうか。

「構え！ —— 始め！」

戦闘開始し暫くしてお互いの後衛が相打ちで倒れ、先にこちらが相手の重槌を持つ前衛を倒したっていうのにヒットアンドウェイのクイックスイッチが上手いクロウへ致命傷が与えられずにこちらのもう一人も削り切られてしまった。

「——っ」

剣の腹で銃撃を受け、奥歯を噛み切りなんとか耐える。あと一撃。お互いそう思っているのか距離を取り、息を整える。背筋を通る汗が気持ち悪い。赤い瞳が私を射すくめてきて、嗚呼、普段魔獣たちはあんな瞳で見られているのかと思ったらなんだかすこし羨ましくなってしまった。

こんな感情、戦場では笑い話にしかならないけれど。

ふ、ふ、ふ、と呼吸をクロウと、かさね、て。

瞬間、飛び出して銃弾が頬を掠めるギリギリの脇を通り過ぎ、奇策として地面に手をつき側転の要領で持ち上げた足でクロウの片腕を引つ掛け全体重をかける。銃を使うにもARCSUを使うにも腕が取られているというのは対応できないだろうし、あわよくばそのままバランスを崩してくれという賭けも あった。

結果は。

思いの外相手の体幹が強く、逆に絡ませた足を肘に挟まれぐるりと回転、からの、背中に衝撃。がは、と息を全部吐き出してしまい意識が体に追いついた時には、青空を背景にして汗だくのクロウが傷だらけになりつつも逆光の中で笑っていた。喉に押し付けられた導力銃の、ひやりとした感触だけが現実感のあるもので。

「そこまで！」

教官の無情な声と共にクロウが退き、既に出番が終わった生徒たちが飛び出してきて他の戦闘不能勢を回復したり起こしている。まだまだ後のグループもいる為さっさと退場しようと軋む上体をなんとか起こしたところで、手が差し出された。当たり前のように。印象や見た目よりも分厚いそれに自分の手を重ねながら、私は自分の敗北をまざまざと思い知ることになったのだ。

「ひっでえ顔」

夜中、喉が渴いて階下の食堂奥にある台所へ水を飲みきたところで、Tシャツにラフなズボンのクロウが入ってきた。階段上付近にいるあたりから気配はうっすらわかつていたけれど、わざわざ煽りに来たのだろうか。私が導力灯をつけていかなかったせいか向こうもつけるつもりはないらしく、窓から採光される月だけが唯一のあかりになる。

そんな暗い食堂の入口に肩を預けて、奥まった冷蔵庫前の私への一言がさっきの言葉だ。

「……」

ごっごっごっ、とコップ一杯を飲み干し、即片手に持ったままの水差しから次を入れる。またごっごっごっ、と勢いよく飲み干した。こういう時にお酒が飲める年齢でなくて本当に良かったと思う。負けて酒を盛大に飲む人間になりたいとは思わないけれど、うっかり手を出してしまう弱さがあるかもしれない。成人までにそういう節度を持つ強さを持ちたいものだと思える。

—— というより、自分が、こんなに負けず嫌いだとは思わなかった、とも、言う。

「正直危ないと思っただぜ」

当たり前のように食器棚からコップをとり差し出してくるので、とくとくとそこに注いだ。あんがとさん、と涼しい顔でクロウはそれを飲み始める。私はと言えば水差しの中身を補充するためにヤカンに水を汲み蓋を閉めてコンロにかけた。

ゆらゆら揺れる炎の前、暗い部屋の中、コンロの前で作業台に体を預けながら並んでいる。

「……術者への駆動解除の判断を早いうちに下すべきだった」

「そうだな、お前ならそれが出来たろうよ」

「あともう一人の前衛のフォローに入れなかったのがなあ、痛かった」

「存分に動かれると面倒だったのは百も承知だったからな」

ちみちみちみちみ、水を飲みながら今日の反省点を上げていくと的確に答えが返ってくる。ああもう本当に、こういう感想戦が存分に出来てしまうところが、にくい。いつもちゃらんぽらんなら覚えていないと言ってくれたらいいのに。

「しかしあんな簡単にぶん回されるなんて想定が完全に甘かった」

「思ってるより鍛えてるだろ」

「うん」

ちらりと横を見上げると、普段髪の毛を上げているバンダナがないせいか平素より少し大人びて見えた。一〜二歳ぐらい。いや、それはさすがに言い過ぎか。顔から視線を下ろして、シャツの袖から覗く二の腕を見る。うん、確かに。普段制服で隠れているけれどこうしてみるとなかなか自分との差を感じた。存外胸板も厚い。

「ウェイト差はどうしようもないなあ」

すこし落とした頭の両の目頭を、空いている手で押さえ支えて嘆いてしまう。回避メインにしている自分にとって体重を増やすのはあまりよくない選択肢だ。攻撃を与えるためにある程度の体重は必要だとはわかっているけれど、体重が増えたときの、あの、自分の体がうまく動かない泥のような感覚が本当に好きじゃない。感覚が果てしなく狂ってしまう。

まあそれならそれで体重を使う博打なんて打つなという話だ。情けない。判断を誤りすぎている。あの時の自分は、賭けるなら導力銃を叩き落とす方にベットするべきだった。

「ま、お前はそれでいいと思うし、隙はオレが潰してやるっての」

ぐしゃぐしゃと髪の毛を掻き乱されて、ここでもされるがままというのは多少腹が立ったのでその腕をすこし前にしていたみたいにしりぞける。その時に見えた笑い顔が、そうそう、みたいな表情だったので、つられて私もすこし笑ってしまった。

「次は勝つよ」

「期待しとくぜ」

かちん、と今更ながらお疲れの乾杯をして、沸騰した水を暫くそのままにして火から下ろすまで、他愛のない話を私たちは続けていた。

……あーあ、それでも本当に、悔しかったなあ。

夜中、《C》としての活動を行って帰ってきたところで、上階から誰かの歩く音が聞こえてきた。まさか気付かれたのか、と若干、ほんの薄い膜程度の警戒をしたところでその足音が更に降っていくのがわかる。探った気配はよく見知ったもので、なんとなく好奇心がもたげた。

薄暗い廊下を通り、階段を軋ませないよう降りたところで食堂の扉の向こうにあるのは明確なそれだった。月の光だけが照らすロビーを通り扉をあけると、これまた薄暗い食堂のカウンター向こうにある台所で水差しとコップを持ったそいつがオレを振り返る。昼間に組み伏せた相手だ。「ひっでえ顔」

実のところ暗くてあんまり見えちゃないがそう笑うと、そいつは無言で水を煽る。一杯、二杯。煽り酒ならぬ煽り水と言うべきか。

「正直危ないと思っただぜ」
「ただこれ素直な言葉だ。」

自分も台所の方へ向かい、棚からコップを出して水をねだると、何も言われないまま水を注がれた。お人好し。たとえ負けたとしてもそれで八つ当たりできないっつーのは、まあ人がいいと言いか、倫理観があると言いか。正直ムカつくところでもある。

水差しの中身が心許ないのか、隣の奴は三杯目の水をコップへ汲んだあたりで一旦それを置いてヤカンに水を入れ火にかける。ヤカンをちろちろと舐める炎の前で、二人して馬鹿みたいにぼんやりしちまった。

「……術者への駆動解除の判断を早いうちに下すべきだった」

唐突な言葉に一瞬間食らったが、なるほど、と喉の奥で笑って同意する。もしかしてこいつ、ずっとあの戦闘を頭ん中でリフレインしてたのか。学院生にしては悪くねえと思うけどな。……俺も応えてやろうってそれなりにやる気出しちまったし。まあ双刃剣ならそういう場面になることもなかったろうけどよ。

あの最後に相対した、一瞬。獣のような瞳にすこし胸を突かれた。普段あんな表情をしているのかって。キルシェで話してた時は気弱なこと言ってたクセに、絶対に負けたくねえっていう気が、闘志が、実直さがあそこにはあった。

その上で、地面へ叩き落とし銃口を突きつけた時に見えた、呆然としたところからの悔しそうな顔だったらなかった。差し出した手を取るときの自分への情けなさを噛み潰したような表情も、お前なんだろうと。

「しかしあんな簡単にぶん回されるなんて想定が完全に甘かった」

「思ってるより鍛えてるだろ」

「うん」

想像以上に素直に返されて、そういうところなんだよなあと思っちゃまう。薄い身体。細い腕。それだから故の身軽さ。防御力の紙さ。だっていうのに負けん気だけは人一倍で。その小さい背中を俺はトワの隣でこの一ヶ月見続けてんだ。

だからお前がキルシェで『戦いたくない』って言った時、そんなんぜってえ嘘だろって思ったもんだ。結果はこの通りなわけだが。自覚のなさは危うさに繋がる。だけど。

「ま、お前はそれでいいと思うし、隙はオレが潰してやるっての」

言いながらぐしゃぐしゃと頭をかき回すと、そんなことをしてくるな、と言わんばかりに腕を退かされる。懐かしい行動に笑っちゃまって、相手もほんの僅かに笑っていた。

一二〇三年五月三十日（土） 放課後

グレンヴィル市——帝都のほぼ真西にあるラマール州の都市だ。

“市”とつくだけあり、前に行ったラントより規模が数倍で学校なども独自に設立されている。トリシュ川が南にあり、そこを水源とした田畑も広大でかなりの自給自足がなされている、第一次産業と第三次産業のバランスが良い都市らしい。

鉄道で更に二〜三十分ほど西に向かうと湖の宿場町ミルサンテもある。その名の通り、目の前には美しいガラ湖や大滝、天気が良ければグレイブーン連峰を臨むことが出来る観光地として賑わっている町だ。出入りのしやすさや宿の多さから、ミルサンテではなくグレンヴィルで宿を取る人も多いのだとか。

ちなみに政治的軋轢はないように思われるが、周辺情報に明るいらしい質屋のミヒュトさんが妙な反応を見せていたので、警戒するにこしたことはない。

結局、チケットはこちらで手配しつつ請求は学院の方へ、という取り決めをして鉄道の駅へと向かった土曜日。サラ教官は本当に事務作業向いていないのだから、こういうことの取りまとめは別の人がやったほうがいいのではなからうか、なんて考えてしまう。

もちろん、サラ教官が無能ということはない。実技訓練においては大変勉強をさせてもらっている。この間なんてナイトハルト教官に斥候技術について更に指導を乞うたら、「自分は軍人であり複数人で行動する者であるから、教わるのであればバレストイン教官の方がいいだろう」という水と油のような二人ではあるけれど実力を認めているような発言がされた。

そして実際に個別指導を頼んだら妙に乗り気になった教官に街道に出てコテンパンにされたのも記憶に新しい。クロウにしてやられた記憶もあってすこし落ち込んでしまったけれど、そんな暇はないのだとも思った。教官が強いなんて当たり前で、私たち士官学院生はいかにその技術を盗むかだ。でもやっぱりクロウのチームに負けたのは悔しい。非常に。

そんな他愛のないことを思い出しながら、私たちは鉄道員のマチルダさんに見送られ二番線のホームから帝都行きの列車に乗り込んだ。

「市長さんがお話があるってことだから、到着したらまず市庁舎へ向かうね」

ボックス席でトワが広げた街の地図を見る限り、駅からまっすぐの大通りを行けば市庁舎が見

えてくるような位置関係なので迷うことはないだろう。

「にしても鉄道のおかげで前回のラントと似たような時刻に着けるけど、今回はすこし遠くなくなったね」

帝国国土省が出している地図上の距離にしてみると三倍はあるのではなからうか。もしかしたら日曜日だけでなく前日の土曜日まで公欠にさせられる課題などが出てくるのでは、とすこし背筋がうすら寒くなる。まあ大変になるといっものはもちろん覚悟の上ではあったけど。

「ああ、鉄道沿線だけマシという考え方もあるんじゃないか？」

「それは本当にそう思うよ」

アンやジョルジュが口々にこの課外活動についていろいろ喋っているところで、ちょうど対面に座っているクロウが妙に考え込んでいるのが見えた。

「どうしたの？」

「ん、ああ、ミヒュトのおっさんが驚いてたつてのが気になってよ」

うん。それは本当に気になる。きつと確証のない情報であんな反応はしない人だ。ただ惑わせるようなことをするとも思えない。食えない人ではあるけれど、虚偽を掴ませるといっものはいろいろリスクもあるからだ。

「頭の片隅に入れておくべきことだけど、それに囚われるのも良くないよ」

トワがそうまとめ、確かに、と頷いたところでクロウが「じゃあブレードでもやっか」とカードを唐突に取り出してきた。本当に布教に余念がないなあとすこし笑ってしまうのも仕方ないことだろう。どれだけ好きなのか。

18時過ぎ。グレンヴィル駅を出ると、目の前に夕焼けに照らされた大通りがすきつと入った街構造が目の前に現れ、なんだかすこしだけ帝都に似ているな、というのが第一印象となった。太陽が沈んで行くところから、大通りの方角が東西だというのがわかりやすい。ラマール本線も西に抜けていくので、鉄橋の上から街を眺めるのもなかなか壮観そうだ。

余所事を考えていてもトワが地図を見ながら先導してくれるから、そのまま五人連れ立って歩いていく。学生自体はそれなりにいるのだけれど、やはり見たことのない制服集団が歩いていると注目を集めてしまうというのは仕方ないかとちょっとだけため息をついてしまった。

—— あ。はっし、と逸れそうになるアンの襟首を掴んだ。

「アン、あんまりナンパしない」

「仔猫ちゃんたちが私を離してくれないのは仕方ないことさ」

「はいはい、歩く歩く」

ジョルジュと二人でアンを道行く女性から引き剥がしながら歩いていく。

いや、まあ、白い貴族制服に光を反射すると深い紫水晶のような美しさの髪があり、加えて容姿と行動も相まって『物語の中のすこし危ない王子さま』に見えてしまうのかもしれない。中には実態を知つてもついていくと意気込んでいる人もいるみたいだけれど。わからないなあ。本当に。

とはいえ本当にアンはあれ以降、私の容姿を褒めないし、無闇に抱きついたりしてこないし、口説いてもこないのので心の平穏が保たれている。その分他に被害が行っていないかという懸念もあるけれど、まずは自分のことを大切にしたい。うん。それに他人が本当に嫌がっているかどうかは私がジャッジするべきではないのだ（嫌だと言える人ばかりではないとは思うけれど）（この辺は塩梅だ）。

「クロウ、どうしたの？」

「んー？ いや、アンゼリカも勝手な奴だなんて思つてよ」

「生活素行に関しては君も大概だと思ふけど」

後ろでゆるゆると頭の後ろで腕を組みながら歩いているクロウに話しかけるとそんな返事がきいたので、思わず突っ込んでしまった。寮や学校でギャブルするわ私の朝ごはん横からつまんで行くわよく遅刻しているわ授業中にも寝ていることが多いわ、どうかと思う行動を挙げれば枚挙にいとまがないというのはこういうことなのだなと。思う。

アンはジョルジュに任せて少し歩調をゆるめクロウの隣に行き、ちらりと横目に見上げた。でもそれだけ生活態度ちゃらんぼらんでも先日負けたのは塗り替えようのない事実で、少し心の暗いものが顔を覗かせてしまいそうになるので、いやいやよくない、と内心首を振った。

……帰ったら七耀教会に行った方がいいかもしれない。あまり敬虔な信徒ではないけれどたぶん話ぐらいいは聞いてくださるだろう。

「あ、みんな、見えてきたよ！」

地図を持っていたトワが嬉しそうな声で示すので視線をそっちへ投げると、赤煉瓦の立派な建物が大通りの突き当たり、T字路になっている道路の向こうに存在していた。今まで歩いてきた感じかなり区画整理がされているみたいで、なるほど、*“市”* などはあると思った。

私が見てきた街だと帝都や旧都よりはもちろん小さいけれど、その次の次ぐらいには入るんじゃないだろうか。

帝都に近いからか案内導力車も通っているので注意深く道を渡り切って、無事に市庁舎の前へ来られた。鉄血宰相殿が進めているという噂の交通法、はやく施行されないかなあ。施行されたら絶対にハイインリツヒ教頭のテストに出てくるだろうけれど。

庁舎の扉の先に受付があり、カウンターで身分を明かしたところで、お待ちしておりました、

と話を通る。さほど待つこともなく応接室に通され市長殿に面会を果たした。進められた椅子は足りなかったので男性陣は立つことになってしまったけど。こういう時、すこしそわそわする。

そうして市長殿曰く、ここ数ヶ月ほど妙な集団が街の外で散見されるらしく、主にそれらの調査を頼みたいと。撃退に関しては流石に学院の生徒に頼むものではないため憲兵隊で巻き取ると仰ってくれた。良い方だ。サラ教官なら絶対にそのままぶっ飛ばせと言っている。

そしてそれとは別に細々とした依頼があるため、明日の朝には宿に届けさせるということで今日の話は終わりを迎えた。その依頼自体はやつてもやらなくてもいいらしい。

市庁舎から出た時にはもうとっぷりと陽は沈み、大通りが目の前にすきつと真っ直ぐ通っているため夜のグレンヴィルが一望できる。そこそこ人口が多いからか、導力灯もふんだんに使われそれなりに街は明るい。

「で、今日の宿って、銀の鍵亭”だっけ」

「うん、ここからすぐのところみたい」

トワが広げた地図を覗き込み、あっちの方かな、と言いなながら歩き始める。何だかんだこの五人移動も最初は人数多いなと思ったけど、なかなか楽しいので、私は好きだなと思ったりんだり。言わないけどね。

大きい宿のおかけか男女別々の部屋に通されたので、着替えの時とかに時間のロスがなくなつたのはとても助かるなあ、なんて思いながら朝の支度をして三人で階下へ。

まだジョルジュとクロウは来ておらず、朝食先に頼んじゃおうか、と全員自分の分を頼む。夜の大皿系ならともかく朝は勝手に他人の分を頼むわけにはいかない。

「……昨日のお話、すこし変だったよね」

注文を終えたところでトワが話を切り出すので、アンと私は頷いた。

「たったあれだけの話を、わざわざ前日に呼びつけて市長直々に話す意味がない」

そうなのだ。確かに『見慣れない集団』が街の外をうろついているというのは治安的によろしくはないし、早急に対処したい話ではあるだろう。けれどたとえ人手が足りないとしても士官学院生にわざわざ市長殿が直接話す内容でもあるまい、というのが第一の心情だった。

「もしかして獵兵が動く事態が進行している、とか」

私の声を潜めた発言に、ピリ、と空気がすこし緊張する。

獵兵。優秀な傭兵部隊のことを特にそう呼んだりする。金銭の授受による契約で殺人を含む大抵のことは行うため、契約自体を禁止している国も多い。けれど帝国の現行法でそれは特に禁じ

られておらず、むしろ政府側が極秘裏に使っている、なんて噂もあつたりするほどだ。貴族に限らず資産家であれば私兵として雇っているということも少なくない。

どれだけ小さな規模だとしても人数としては確実に私たちよりは多いだろうし、また武器も殺傷非殺傷問わずそれなりのものが揃えられているだろう。

「そうなると思いますが私たちの手には負えないぞ」

「そう、だね。でもそのことも可能性に入れて動こう」

二人ともミヒュトさんの情報が脳裏に過っているのかもしれない。『用心していけよ』。まさか本当にそういう意味だったりするのだろうか。

「……それにしても二人ともなんか遅くない？」

「ジョルジュが起きていないとは考えづらいから、クロウに巻き込まれているんだろうさ」

「クロウ君、普段の授業でも遅刻したりしてみたいだから心配だよ」

中間試験もまだなのに既に単位大丈夫なんだろうか、と他人事ながら私もちょっとだけ心配になってしまった。これクロウが赤点取ったらチームの君たちは何をしていたんだね、とかハイインリツヒ教頭に言われるのかなあ。言われそう。

私たちの朝食が来てから暫くして。

のたのたと歩くクロウとすこし疲れた表情のジョルジュが現れ、嗚呼……、と朝の一仕事を感
じてしまじョルジュに三人で甘いものを奢った。おつかれさま。

「はい、というわけでこれが今回の課題、です」

朝食も無事に終わり、宿の人に預けられていた赤い獅子の封蠟が施された封筒からトワが中身
を取り出し全員で覗き込む。

- ・トリシュ川付近で目撃される謎の集団の調査
- ・ガラ間道に出現している飛行型手配魔獣の討伐
- ・故人へ捧げる花の採集

「……集団の調査は必須で、魔獣の討伐もわかるけど、花の採集？」

「いきなり平和なもんが出てきたな」

「依頼人は……七耀教会にいるようだから、まず話を聞きに行くべきだね」

「教会は東に、手配魔獣は西に、集団は南。見事にバラバラだ」

全員で依頼書と地図を眺めながら、すこし唸ってしまふ。ここに入ってきている、浮いた依頼の花の採集。もしかしたら昔は大丈夫だったけど今は花の群生地が魔獣のテリトリーになってしまっているとかそういうオチな気がする。

「おっきな街だし、出来ればみんなで行動したいんだけどどうかな」

トワの提案に全員同意したので、とりあえず外に出る二つを後回しにして教会の方へ向かうことにした。現在、朝8時。

この七耀教会はそれなりに大きいらしく、街行く人に尋ねたらみな親切に教えてくれたし、近くなったらなんとなくそちらだろう、というのが伝わってくる街区へ切り替わっていった。

「おー……」

トリストタにある教会も別に粗末ではないのだけれど、それよりは倍ほどは確実に大きく、礼拝堂も広く取られていて、ステンドグラスから採光される明かりが大層綺麗に教会内を彩っていた。硝子工芸品はあまり触れてこなかったの、なんだか新鮮に見える。

中にいた助祭らしき方に話を聞いてみると、ああ、と依頼を出してくれたであろう方に引き合わせてくれた。依頼を出してくれたのはお年を召した上品な男性で、教会に相談をしたところ行政に話がいき、私たちが担当することになったらしい。

「女の子もいるというのに、こんな依頼を申し訳ないです」

「いいえ、亡くなられた伴侶の方のお墓にお花を添えたいと思うの、すごく素敵です」

トワは身長が小さいからか、とても年配の方のウケがいい。うっかりすると本当に孫のように可愛がられるので、それを見てるとすこし和んでしまう。

まあつまり、要約すると亡くなった方の好きだった橙色の花——ロシタンの花を供えたいが花の群生地に魔獣が住み着いてしまい花屋が普段使っている採集グループもおいそれと近寄れない、ということを取り寄せも出来ない状態になっているとのことだ。どうやら今日がその方の命日だそうで、藁にもすがる思いだというのが伝わってくる。

「任せてください、私たちこう見えても士官学院生で荒事には慣れていきますから」

にこりと笑い、胸を軽く叩く。愛する人のお墓に、相手の大好きな花を供えたい。トワも言うけれどそれは本当に素敵なことだし、出来ることなら力になりたいと思う。

「ああ、ありがとう……花屋の方が言うには、ガラ間道の方の水気のあるところを好むらしいです。どうか、くれぐれも怪我のないよう」

「はい」

そう心配をされながら見送られ、今日の計画を確認しながら東の方へ歩いて行った。

花を摘む前に街道の安全確保も兼ねて手配魔獣をやってしまおうという話になり、ガラ間道を注意深く警戒しながら歩いていたらある高台のところはその影を見つけた。赤と青を基調とした雄々しいロックバード。鋼のような羽根を持ち、上空からそれによる鉄雨のような攻撃を得意とする飛行魔獣だ。

広範囲攻撃から他者を守るという点で私は不適當なため、アンとジョルジュが前に出てクロウとトワを守り、後ろの二人がアーツで撃破する、という手筈になった。一応挑発戦技を駆使するという案もあつたけれど、一切効かない可能性も考慮してそういう布陣に。万がクロウとアンがリンクしなければならぬ事態に陥った際に不安要素だけれど、四の五は言っていられない。

…撤退を判断しなければいけないバックアップは大事な仕事とはいえ、最近自覚したことではあるけれど前にでるのが自分は好きなんだと思う。だけど四人が戦っているのを低木に身を隠しながら見守る。大丈夫。アンはトワを守るという意志のポテンシャルがおそろしく高いし、ジョルジュはクロウの腕前を信じてハンマーを振りかぶって羽根をなぎ払う。それを信用し、的確にARCSを駆動して詠唱を開始する二人も本当にすごい。

そうしてほどなくしてロックバードは地に伏し、トワに倣うようにして私も黙祷した。

「なあ、アレじゃないか？」

高地からガラ湖方面を見渡していたアンが何か地面の方を指差すので、近寄って隣から崖を見下ろしてみると橙色の花が風に揺られているのが見える。レースのような花弁に、水辺に生えている橙色の花。それがわさつと生えており、確かに群生地の様相を呈している。

「ああ、それっぽいねえ」

奥にはうつすらガラ湖も見えるため切り取って絵画にでも出来そうな風景で、思わず導力カメラを構えて撮影した。こうして自分がトリスタにいたままじゃ撮影出来なかった光景を、みんなと一緒になら見られる。あの日の旧校舎の高揚から続いているようなそれが、何だか嬉しかった。「ここからあそこだと、ぐるりと回り込みながら降りていく感じかな」

地図を見ながらジョルジュがそう言う。この高さなら装備を置いていけば降りられそうだけど、魔獣の住み処になったって話もあるしあんまり単独行動するべきじゃない。たかだか三十分一時間の短縮に命を差し出すのは流石に割りに合わないだろう。

「……うん、みんなで行こうか。どうせ結構早いペースで焦る時間じゃないし」

「まだ9時半だもんね」

「ああ、そうだな」

トワに微笑まれ、クロウに背中を叩かれる。

敵わないなあ、なんて苦笑しながら、私たちは全員で花の元へ向かった。

結論として、ロシタンの花は手に入れられた。ただし魔獣の気配はなく、おそらく手配魔獣として討伐したロックバードがこの辺り近辺を縄張りしていたのだろうという推測がたち、道中も細かい戦闘はあれど大きなことは何もなく教会へと戻っていったのだ。

「本当に嬉しそうでよかったね」

我が事のように両手を合わせて相好を崩すトワを見て、本当にやさしいな、と思う。花を手に入れるときには既に安全が確保されていた、というのは結果論だからあの判断が間違っていたわけじゃないだろう。うん。

「しっかしえらく早く二つとも片付いちゃったな」

「だが残る一つは警戒に警戒を重ねても足りないくらいだろう」

『謎の集団』……情報があまりにも不明すぎて、何が起きてもおかしくない、というのが非常にやっかいだし、ミヒュトさんの言葉と笑いがその不安を助長させる。悪戯にそういうことをする人ではないと信用できるからこそ、この案件のきな臭さが増していると言っても過言じゃない。「情報集めるにしても広い街だからねえ」

「……街じゃなくて田畑の作業している農家の人ならどうかなあ」

トワがそう提案をする。

「グレンヴィルの畑ってトリシュ川沿いであって、農家の人たちもその付近に家を構えてる筈だよ。だから街の人より何か目撃してる可能性は高いんじゃないかなって」

「ああ、加えてグレンヴィル市からは道が通っているからその不審者たちと遭遇する率も低い、か。うん、僕はいいと思う」

ジョルジュの補足と同意に私含む他の三人も頷いて、行動の指針がさっくりと定まった。やっぱりトワはすごいな。

「あ、でもちよつと休憩もいいと思うな」

「セリがそんなことを言うなんて珍しいじゃないか」

「あそこのジェラート屋さんが美味しそうで」

「食いもんかよ」

「ふふ、知らない場所の索敵疲れるもんね」

「ジェラートいいね。僕も食べようかな」

「ジョルジュお前もかよ」

「あつ、おいしい！ 苺がすっごい濃厚」

「お米のアイスって初めて食べたけど美味しいねえ」

「トワ、こっちのやつ一口食べる？」

「じゃあ私のも食べていいよ」

「……うわ、お米のほのかな甘さがすごい」

「セリちゃんのも自然な苺の甘さが贅沢って感じだね」

「……女って本当に何でもシェアすんなあ」

「かわいい子たちがジェラートを差し出しあっている、いい光景じゃないか」

「お前そのクセ辞めたんじゃないのかよ」

「セリに直接言わないくらいならいいだろう」

「ああ、やっぱり本人に釘刺されたんだ、それ」

そうして英気も養い、街を出て暫くしたところで昼になることを考え、*“銀の鍵亭”*で追加料金を支払い弁当を拵えてもらうことにした。それを持って南に抜け田園の方へ。道は土とはいえかなり平らに舗装されていて歩きやすく、魔獣は多少居れども足場がしっかりしているなら基本は苦にならない。襲ってくるなら迎え撃つまでだ。

暫く道を進み、畑の所有者の方のだろう家々が見え始めた。

「すみません、どなたかいらっしゃいますか？」

コンコン、とトワが先頭に立って住居のドアノックカーを使う。後ろに控えるのは私だけで、他の三人にはすこし離れたところで待機してもらった。見知らぬ学生服を着た集団が来たら警戒しちゃうよねえ、ということなのだけど、腰にダガーと剣を下げている私もだいぶやばいのはなからうか。見た目の庄の弱さとしてはトワと私が適任というのは間違いないが。

「はいはいどちらさま。っと、お嬢ちゃんたち見ない顔だけどうしたんだい」

出てきてくれたのは人の良さそうな方で、こちらの事情を話すと、ああ、と困り顔で頷かれた。「正直ねえ、夜中に足音が聞こえたり、関係ないけど獣の唸り声とか、畑がすこし荒らされたり、あとは人によっては幽霊の声を聞いたなんて噂まで流れちまってほとほと困ってるんだ」

「そうなんですか……」

幽霊。ラントでも似たような噂を聞いたけれど、偶然なんだろうか。

「まあこれといって人が襲われたって話とかはないけどさ、調査するなら気をつけてくれよ」

「あ、すみません。最後に一つだけ。その足音や幽霊の噂っていつ頃から流れてましたか？」

「ええっと、年越しはしてたから……三ヶ月くらい前かな」

「そうですか、ありがとうございます」

そんな風に田園に居を構える農業や畜産業を営む方々に話を聞いて回り、地図に方向や頻度を書き込んでいくとある程度の絞り込みが可能になってきた。

とりあえず情報をまとめようと言うことでグレンヴィルの田畑にある街道の端っこ、放つておかれた空き地に立ち止まって私たち五人は額を突き合わせる。

「……偶然だと思う？」

「幽霊の話？」

「うん」

ラントでは当時三ヶ月前、グレンヴィルでは三〜四ヶ月前。時期が妙に一致している。

「ただ私たちが任されたのはあくまで調査だろう？」

「あんまり頼まれてねえことに首突っ込むのもなあ」

アンとクロウが止めに来るのもわかるけれど、何だか妙に引っかかるのがこの案件の嫌なところだと思う。とはいえ、自分だけが固執しても仕方のないことだ。あくまでチームで動くというのを前提すると決めているのだし、私が単独行動をするにしてもバックアップは必要不可欠だ。

「うん、調査なんだよね」

そつと地図を見ながらトワが呟く。

「現状だと噂の発生時期や活動場所だけで、実際どういった集団が動いているのはわからない」

「……いや、トワまさかお前」

「私はセリちゃんにこの場所を探索してもらうのも手だと思ってる」

全員行動はあまりに目立ちすぎる。だから私もそれを提案したかったのだけれど、まさかトワからそれを言ってもらえるとは思っていなかった。

「私は反対だ。集団がベースを築いていたらそれこそ危ないだろう」

「ベースが築かれてるレベルなら市の憲兵団がとくに調査完了してるよ」

アンの発言に自分が反論する。いかに統治者であるカイエン公がいらっしやる海都オルデイスから遠いとはいえ、帝都との重要中継地点たり得るグレンヴィル市を見捨てるような愚行は犯すまい。

「……君はどう思う」

「アン、もし多数決で決めようっていうなら、僕はノーコメントを貫かせてもらうよ。これは全員で話し合うべき問題だ」

賛成と反対が同数状態の中、問われたジョルジュはそう言い切った。多数決は簡単ではあるけれど、禍根が残りやすい決め方の一つでもある。確かにチーム内で行うにはリスクキーだ。

「それもそうか」

アンはそれ以上その決め方を通すつもりはないようで、腕を組んですこしため息を漏らしただ

けに留めた。賛成派の私たちは、反対派に納得してもらわないといけない。危険がないって言うことを。

「賛成の私から提案させてもらうけれど、ARCCUSの通信は常時ONにしてずっと持ってるし、可能ならアンカクロウに後方100アージュぐらい離れて追跡してもらい、その追跡者との通信は絶対に切らないで行く、とかでどうだろう。ラントでやったみたいにジャンクションにするには遠く離れる可能性が高そうだから無理だろうし」

「加えて私がかげられる強化はセリちゃんに全部かけるつもりだよ」

「可能ならARCCUSに手ぶらになれるアタッチメントなどがあればよかったのだけれど、現状ないのだから仕方ない。今度レポートに記載し、開発の検討を頼めないかRF社や財団の方にお伝えしたい限りだ。」

「——いや、先行で入るならARCCUS持ってるのは邪魔だろ」

「それはまあそうなんだけど」

出来ることならこの間みに閉じない細工をして端末ポーチに入れておくぐらいに留めたいとは思っている。でもそれだと瞬時の撤退命令が聴けないのが困りどころ。

「……ARCCUSは接続切れないようにしてからポーチに入れて、50アージュ後方でオレがつくなら妥協はする」

と、クロウが意見を翻した。それに対して同じく反対意見を述べていたアンがすこし眉を顰めて口を開く。

「なぜ君なのか理由を聞いても？」

「単純に身体能力と支援距離考えたらそうなるだろ」

確かに、ある程度ついてくるぐらいなら二人とも出来るだろうけれど、何かあった際に50アージュのロスが確実に発生するのか、しないのか、というのはことごとくいう場合において命取りになりかねない。

暫く考え込むようにしていたアンは、諦めたように組んでいた腕を解いて頷いた。

「わかった、私もそれでいい。但し、セリ。言語化出来なくとも違和感を覚えたら直ぐに撤退することを肝に銘じてくれ」

何かあってからでは遅いんだ、と。

「大丈夫。この命を粗末にはしないよ」

ぼんぼん、と自分の胸を叩く。

前にみんなと女神に誓ったこともあるし、それに思い出したのだ。前にアンに戦術リンクの破綻を問い詰められた時、母さんと父さんのことを。もう最近は思い出さないうようになっていたけれど、私に覆い被さってくれたあれは、間違いなく愛だったのだと思う。二人にもらった自分の

名前と、命を、これからも大事にしようとは私は改めて誓うのだ。

とはいえ、グレンヴィル市を南下して情報を集めていたのでそれなりに太陽は天辺を通り過ぎ、既に13時を回ろうという時間になっていた。噂や目撃情報が多い場所を調査するにしても腹ごしらえはすべきだろう、という話になり、調査場所に近付きつつ適当なところを探して腰を下ろし昼食を取ることに。

「この甘辛なタレの鶏サンドイッチ美味しい」

「ラントでもそうだったけど、ご飯の美味しい場所ばかりだね」

「サラ教官のことだから酒のツマミが美味しい宿を指定しているんじゃないか？」

「あー、そりゃありそうだな」

「林檎の紙包み焼き、これなら僕でも出来そうだなあ」

もう少ししたら体を動かすから、あんまり物を入れるわけにいかないのが実に惜しい。でもこの陽気だと残していても行って帰ってきたら駄目になっている可能性が高いので、誰かの腹に入れてもらうのが一番だ。

「ごちそうさまでした」

2 / 3 ほど食べて手を合わせ、作った方や空の女神に感謝を捧げる。

「あれ、セリちゃんそれだけでいいの？」

「森に入るから少なめにね。誰か食べられそうなら食べてくれると嬉しいな。口つける前に分けてはいたから」

「じゃあオレが」

「クロウ以外で」

「除外かよ！」

当たり前だと思う。私が食べられないものを君が食べられる道理がないだろうというか全部食べた上で食べようとしているのかこの男。

「ったく、しゃーねーなあ」

「自分が言い出したことじゃないか」

嘆きながらごろりと腕頭の後ろで組んで寝転がるクロウ。そんな風に言うなら自分がついていくなんて条件出して妥協せず、そのまま反対し続けていればよかったのに。あれで風向きが変わったと言っても過言じゃない。

「仕方ねえだろ、お前が探索すんのが一番いい手だとは思ってたんだからよ。妥協点見つければそりゃ賛成もするっつーの」

その言葉に、少し面食らってしまった。そんな私が何か言う前に、ちよいと寝るぜ、なんて言

つてクロウは額のバンダナを目元まで下ろし、すぐに寝息が聞こえ始める。

空を見上げると鳥が飛び、雲もちょうど良く、風は気持ちよくて、みんなの会話が聞こえてくる。ピクニック日和のような春の暖かさに、すこしだけ課外活動できていると言うことを忘れてしまいそうになった。いけないいけない。

行動再開、14時。

グレンヴィルの南西、ガラ間道から少し外れた場所は丘陵となっていて、山ほど大きいわけではないけれど平地というには起伏がある地形になっている。音の出どころとして集中している場所へ今は身を隠しながら向かっているとこだ。

一応ついてきてくれているクロウに合わせてあまり木の上は行かないようにしているけれど、案外大丈夫そうな気がする。でも打ち合わせなしでやったら後でなんか言われそうなのでやめておこう。とりあえず地道に手持ちのダガーで枝を切り落として行くしかない。

息を潜めて、地面を確かめつつ歩いていく。入った時の違和感が輪郭を得ていき、森に秩序がない、という結論に達した。獣も人の手も入っていない。完全なる無秩序。歩く存在がいないのだ。この辺り一帯。それはおかしい。これほど豊かな場所ですんなることが起きるだろうか。けれど確かに獣の臭いも、息遣いも、足跡も、全てがない。辛うじて虫はいるにしても数が少ない。

口内に溜まる唾液を嚙下しながら、存外草が枯れている道を歩いた。これ自体は上部の枝の伐採がされない、人の手によって管理されてはいない森ではよくある光景だと思う。

生物の気配ははまだ、後方についてくれているクロウのものだけだ。

進んでいくと開けた場所に出るのか、明かりがつよく差している。しゃがんでにじりよって行くと、窪地を見渡せる場所に出てきたことに気がついた。いわゆる沢と呼んでもいい場所で、小川が流れており、もう少し人地に近ければアウトドア観光地になったかもしれない、という風に綺麗で整えられている。……不自然なほどに。

暫く観察していると、水辺のそばに石を組んだ跡があったり、火を熾したのか炭が捨てられていたり、何かを引きずったようなこすれが見て取れたり、かと思えば獣の足跡もあったり、あまり隠そうとはしていないのか雑な処理で人間がいた気配がそこかしこに見てとれた。

「……こちらセリ。山間に人間がいた痕跡を発見」

『こちらクロウ、了解した。周囲に人影はないんだな？』

「ない」

ARCSをポーチから出してそう吹き込みつつ、地図を出して歩数と角度で場所を特定する。うん、人里から離れすぎているし、どっかの貴族が来たとしても多くの獣と一緒に来ない。も

う既に痕跡は薄くなっているため数の特定は困難だけれど、二十は下らないだろう。

出来れば沢に降りてもっと痕跡を近くで見たいけれど、さすがにそれはこの状態でリスクが高すぎるため却下だ。

一旦身体をほぐす意味で立ち上がりかけたところで肌が粟立ち、ARCSと地図をポーチへ突っ込み手近な樹の上に急いで登り息を詰めた。慌てた首で何かが起きたのはクロウも察知しただろう。知覚範囲外からそれでも判る殺気が迫ってきている。その方向を注視していると、黒い獣が木々の合間から現れいでた。拘束具にも似た何かをつげられたそれは、おそらく私を探している。

手の中でダガーを回転させ重心を改めて確かめ、相手がこちらへ気が付いたと判断した瞬間それを囷として投げる。そのままそれを追うように太い枝を伝い遠心力で距離と勢いを稼ぎ、囷の筈だったダガーで手傷を負った獣へ携えた片手剣を両手で構え頭上から突き刺した。血の噴水。魔獣の血液を盛大に浴びてしまったけれど、死体が光となると共にそれも消えて行く。静かにそれを見下ろしていたところで、魔獣の脚部に弾痕がちらりと見えた。

「……」

ため息をつきながら投げたダガーと地面に残った拘束具のようなものを手にする。

地点特定用の導力器がついている可能性もあるけれど、街までは直線距離で少なくとも10セ
ルジュはあるから流石に追跡も出来なくなるだろうし、諸々考慮をして回収しておくべきだろう
と判断した。

そうして30アージュほど歩いたところにいるクロウに合流する。相手は分かっていたかのよう
に動かなかった。

「ありがとう。脚を撃ち抜いてくれたからダガーが当たった」

「おう、感謝してくれよ」

流石に投擲用でもないダガーが命中する確率は低いと思って、気が引けたら程度で投げたのだ
けれど、クロウの針の穴を通すような射撃のおかげで余裕が持てた。歩き出しながら、今いる場
所から元々いた場所を見やる。

陽が傾き始めた森はそれなりに暗く、木々だって不均等に生えていて視界はあまり開けていな
い。いや、本当に、ここからどうやってあそこで当てられるんだろう。自分との自力の差を感じ
させられたところで、ぐしゃぐしゃと頭を撫でられた。

見上げてみれば相手は笑っていて、そういう余裕そうなところが本当に気に入らない。

……本当に気に入らないのは、自分の不甲斐なさについてだけでも。

「セリちゃん！」

17時半。丘陵から出て元々入った場所へ二人で歩いて行くと、身を隠しつつ待機してくれていたトワがこちらを視認した途端駆け寄ってきて、抱きしめられた。

「ちよ、ちよちよちよ、制服汚れるよ」

魔獣の血液は消えるけれど、土汚れとかは当たり前前だけ消えないのだ。ある程度歩きながら落としたとはいえ汚いことに違いはない。

「いいよそんなの……っ」

ぐりぐりと頭を肩口に押さえつけられ、柔らかな髪の毛を頬に感じてしまい何だか居た堪れなくなってしまう。隣のクロウを見上げれば肩を竦められた。

まあ、一応生存の誓いはあるとはいえ通信も出来ない状態で遠くから銃声とかが聞こえたら心配もするだろうと思うので、甘んじてこれは受け入れよう。一応ARCSの通信が入るところまで来たら無事の報告はしていたけれど、それでも姿を見るまでここで心を砕いていてくれたのだろうか。

「で、どうやら収穫はあったみたいだね」

「さっき通信で言ったのがそれかい？」

「うん」

近寄ってきた二人に手で挨拶しながら抱きしめられたまま、持っていた拘束具をジョルジュへ渡す。同時にトワが離れ、案の定緑の制服の一部が茶色くなっているのので軽くパラパラと落とした。

「追撃はなかったし、たぶん警戒用に置かれた個体だと思う。他には確認出来なかったけど、正直調教魔獣の気配を探るのは分が悪いかな」

私はそれなりに気配を探るのも上手いのだろうけれど、人にしては、という枕詞がもちろんつく。あの魔獣がもつと賢く、気配を隠すのが上手ければ私の喉笛が切り裂かれていた可能性は十分あった。

「しかしそれは逆に『なんかありますよ』と言わんばかりじゃないか」

腕を組んだアンの言う通り、こうやって証拠を回収されるリスクを負ってまで魔獣を置いて行くと言うのは雑な仕事か、それとも殺し切れると踏んだのか。

「調教済みの魔獣が絡んでるってことは、相当危ない案件だと思う」

ぎゅ、と両手を握りしめたトワがそう言い切った。

「そうだな。さすがにオレたちの手に負える案件じゃねーわ」

その言葉には全員同意する。こうして生還出来たのだから、拘束具の件もあるしとつとと街へ戻り、教官へ報告し、市へも報告を済ませるべきだろう。方針も再度決まったし、と歩き始めた

らトワがそっと隣へ来た。どうかしたのかな、と首を傾げると、申し訳なさそうな瞳と視線が
かち合った。

「ごめんね、本当なら休憩が取れたらいいんだけど」

「いいよ、そこそそ急を要する話だし、このまま帰ったら鉄道でトリストアまで一本じゃん」

そしたらまたキルシェで晩御飯食べようよ勿論みんなで、なんて手を取りながら言ったら、そ
うだね、とトワは微笑んでくれた。

途中、地図で場所の共有をしていると郊外から街へ出ていたのか楽しそうな男の子の集団とす
れ違ったりする。年齢としては日曜学校の年長組ぐらいだろうか。ちょうど私たちの少し下あた
りだろう子達で、元気がいいねとみんなで笑っていた。

「あれ、何か揉めてる……?」

18時過ぎ。グレンヴィル市の南口が見える位置まで帰ってきたところで、門兵の人と女性男性
複数入り混じりの集団が何やら言い合いをしているようなのが見えてくる。

「本当にこっちは来てないんですか!」

「交代の際に一瞬人はいなくなつたが、基本的に17時以降ここを出て行った者はいない」

「でも幽霊の噂を見に行くんだって言ってたらしいんです!」

どうやら人探しのように、子供が肝試しでいなくなったのを親が探しているという感じだろうか。でも何か引っかかる。

「……ねえ、もしかして、さっきの子たち」

トワが震えた声で呟き、つま先を揉めている集団へ向けた。私たちもその行動に異論は唱えず後ろに続く。

「すみません！もしかして、13歳くらいの男の子たちを探してますか？」

「あなたたち見たの!？」

「は、はい、茶髪や金髪の男の子たちが道を走って行くのとすれ違って」

「確か、カレルだとかシドニーだとか、そう呼び合ってたか」

肩を揺さぶられるトワをアンが支えたところで、クロウがそう補足をする、ああやっぱりと女性一人が顔を覆った。

「最近は特に危ないから森に行つてはいけなと言つたのに……!」

「——アンちゃん、セリちゃん、クロウ君」

「言わずもがなさ、トワ。私たちが先行しよう」

トワの固い声に対して、パシン、と事情を察したアンが拳を平手に合わせそう言う。

ここに残るトワとジョルジュは市庁舎の方に行つて事情を説明しつつ、山狩りをする人員を必

ず確保してくれるだろう。もしかしたらサラ教官も来てくれるかもしれない。だけどこれは時間との戦いだ。

「――女神の加護を！」

そう全員で拳を合わせて、各々の役割のために三人でまた森へ走り出した。

「とりあえずさっきの沢か？」

「そうだね、でも低所から高所へ上がるのは面倒だから、結局さっき襲われた地点に戻ることになると思う」

「さっきの子供たちが入っていなければそれでいいんだがね」

「そりゃ樂觀視しすぎってもんだろーよ」

そんな軽口の応酬をしつつもしっかと全員で走りながら方針を決めていく。

すれ違ったのは何分ぐらい前だろうか。地図を出して場所の特定と共有をしていたところだから、会話の始めだと思う。合流したのが17時半、南口に着いたのが18時過ぎ、既に30分以上は経っている。とつくのとうに森へ入っていてもおかしくはない時間だ。

「あの森は極端に獣が少なかった。たぶん調教魔獣に襲われたり、それを警戒して別の場所へ逃げた後だったんだと思う。……だから」

「日曜学校の年長組でも森の奥まで行けてしまっ、か」

「加えてもし俺たちが昼間通った道が偶然見つけられてたら道も確保できてるわけだ」

二人の回答に、こくり、と頷いた。そう、森の奥へ入っていける条件が整ってしまったている。

丘陵の奥へ至る道はそれこそ無限大だし人の通りづらい場所を通って行った自覚はあるので、クロウの言ったことは殆どあり得ない話ではあるけれど、それでも、あり得ないなんてことはあり得ない。悪魔の証明になってしまっのだから。

「ったく、それにしてもやたら魔獣が出やがる！」

「それに関しては同意見、だッ！」

アンが出てきたヒツジンに蹴りを入れて盛大に吹っ飛ばす。あんなのに構ってる暇はないというのに、暗くなってきたということもあってかこちらが少人数だからかぞろぞろと出てくるのだからタチが悪い。

ガラ間道の方は観光地ということもあってそれなりに街道灯が整備されていたけれど、ここらは農地だけあってかぼつりぼつりとしかなく、魔獣避けが徹底されていない。そこに例の調教騒ぎで居場所を追われた魔獣もいたりするのだろう。

「ARCS駆動——クロノドライブ！」

クロウが魔獣を振り切るために全員の身体強化を図る。軽くなった身体と共に、またつよくつ

よく地面を蹴った。

丘陵に近づいて来たところで、A R C U Sの明かりをつけてくれるようアンに頼み、麓を注視して行く。確か五人だ。五人もあの年齢の男の子が歩けば絶対にどこかしら痕跡が残るはず。

「……ス トップ！」

急ブレーキをかけて制止を求め、見えた場所へ急いで近づいていく。クマザサの群生の一部が折れたりひしゃげたりして、足跡も複数人分そこに集中しているのがわかった。昼間はこんなことになっていなかった。間違いない、ここから入ったんだ。私たちが使った丘陵の入口よりも多少は街に近く、これなら彼らが沢へたどり着くより前に捕捉して連れて帰れるかもしれない。

顔を上げると、暗闇が手招きをしている。

夜の森。知らない森。どの存在の手も入っていない森。

どれもこれも、侵入するのは躊躇われる条件ばかりが揃っているけれど、見据えたその場所がどれだけ暗かろうとも私たちは伸ばす手を諦めないと全員思っている筈だ。

「行こう、セリ」

「とっとと悪ガキを連れて帰ってやるとしようや」

二人のその力強い言葉に、うん、と返して三人で森へ入った。

素人集団のため、比較的歩きやすい道を見つけて歩いていたようで、追跡はそれなりに容易だと思われた。隠密も何もなく音を立てているのは、何かがいるならこちらに引きつけたいと言っているもあるし、少年たちから視認してほしいという願いもあるけれど、そもそも危ない目に遭っていない少年たちがこちらを認識して声をかけてくれるだろうかという懸念も勿論ある。何が最善かなんてわかりはしないのだ。

「……いた！」

月明かりがあつて助かった。前方、500メートルほど前にうつすらと動く人間のような影がある。二人にはまだ見えていないのか、どこだ！、と叫んでいるけれど私が先導するので問題はない、はず——！

「調教魔獣の姿を確認！」

騒ぐ少年たちの背後へ忍び寄る複数の影。1、2、3、4。嘘だろう。そんなにいるのか。「先行する！ 見つけて！」

体力を計算して走ってはいられないとギアを上げて地面を蹴る。森の中で走ると言うのは、思う以上に技術でどうにかなる話だけれど、技術がないと走りづらいと言うのも確かな話で。

「おっと、私を置いていかなくてくれたまえよ！」

それでもアンはついて来た。クロウは後ろで支援にまわってくれるんだろう。

「上ッ等！」

私は笑って更に速度を上げた。見えてくる影の動作が、既に狩りを始める溜め動作に入り、思わずダガーに手が伸びた。いける？いけるか？あと30アージュ。25。20。絶対にこの速度じゃ間に合わない。

『獲物を狙うんじゃない、着地点を見極めんだよ。ようは観察だな』

帰り際、クロウが動く獲物を定めるときに使うコツを話してくれて、なんてことのないように喋るなあとすこし眉を顰めてしまったのだけれど、今この瞬間、それは正解だった。

ダガーを振りかぶり、現在の速度を乗せて投擲する。

果たして。魔獣の悲鳴が上がり、次いで少年たちの悲鳴もあがり、二人して魔獣と少年たちの間へ割り込んだ。見えた人影は全部で四つ。一人足りない。

「残り一人は!？」

「君たちは私たちの後ろへ！」

雪崩れ込んできた私たちに目を白黒させる少年たち。ああ、ちくしょう、説明する時間ももどかしいっていうのに！

「あつ、し、シドニー！」

声がかんだ方向へ見やると、腰を抜かした少年の前に黒い調教魔獣が唸りを上げて構えていた。

「——！」

お互い今すべきことを、と残っている片手剣で一匹斬り伏せて少年の元へ急行する。一步一步が遅く感じる。魔獣が私の存在に気がつき、まずは少年へ襲いかかろうとするのが見えた。

「ああ、ああああああ！」

最後、跳躍し、硬い鋼の音が響く。——間に合った。間に合いはしたけれど、逆手で盾のように持った剣に魔獣の牙がギギギと食い込み止まり、空いていた片手は少年を胸に抱きこんで安全を確保するように使っているためどうしようもない。アンも四人を守りながら二匹と戦っている最中だろう。ここから、どうやって打開を。

「やらせるかよ！」

瞬間、クロウの声がして自分の目の前と離れたところから魔獣の悲鳴が聞こえた。弱まった嘴みつきから魔獣の腹に蹴りを入れ無理やり剣を抜き、即座に突き立て絶命させる。同時にもう一匹の悲鳴も聞こえ、森に一瞬だけ光が溢れた。

「あー、めちゃくちゃイイところ取って行くじゃん……！」

「ああ、本当にそうだな」

はは、と笑いながら、走りっぱなし緊張しっぱなしで震える膝に手をつけて立ち上がり、暗闇の中から出てくるクロウにその声をかけると、近寄って来たアンも同意をしてくれる。

私の後ろにいた少年は他の少年たちと合流し、お互い抱きしめあつて号泣して、それを背景に、私たちは拳を合わせた。

そうして、遠く、街道の方から統率の取れた音が聞こえ始めたのだ。

トワたちの説得もあり、グレンヴィル市の市長殿の要請で街に若干駐留していたラマー領領軍による山狩りが正式に行われることになり、残っていた魔獣も程なくして掃討されるだろうという見込みが到着した領邦軍の分隊長殿から伝えられた。

私たちはと言えば、疲れからか申し訳なさからか静かにしている少年たちを軍と共に街へ送り届け、南口で心配そうにしていた彼らの保護者らしき人々に怒られるのを横目に待ち合わせ場所の駅へ。辿り着いたそこにはトワと、ジョルジュと、サラ教官が立っていた。

口々にお疲れさまと労ってくれたけれど、残ってくれた三人だって領邦軍を動かすのに尽力してくれたことだろう。それは私たちじゃ絶対に出来なかったことだ。トワやジョルジュ、そして実のところ見守ってくれているんだらうサラ教官。私たち前衛が後顧の憂いなく動けるのは彼らがいってくれるからだ。

ああ、でも今日はもう疲れた。眠りたい。

サラは「やることがある」だとかでグレンヴィルに残って、結局オレたちだけが先にトリスタに帰ることになった。ボックス席で、大体いつも通りの組み合わせで向かい合う。と言ってもトワとセリは仲良しに眠りこけて静かになって、ジョルジュはといえば客が少ないのもあり別のボックス席で回収した例の魔獣の拘束具の簡易解析を始めちゃった。

つまり、目の前にいて意識があるのはアンゼリカ一人だ。この課題じゃリンクが妙な挙動をして繋がったり切れたり、散々な相手とも言える。

「今回も大分ハードだったか」

二人の寝顔を眺めるようにしてそいつが呟いた。

「ああ、ほんとにな」

勘弁してほしいぜ、と言いながら、最後のセリのダイブが脳裏をよぎる。他人のためにああまですて必死になれるって言うのは、本当にお人好しにも程があるって話だ。もしかしたら即死はしなかったとしても、片腕持っていかれてたって可能性もあったろうに。馬鹿な奴だ。

「クロウ」

「あんだよ」

「どうしてそんな顔でセリを見ているんだ？」

——それは、トラヴィス湖畔で問いかけられた時と似たような瞳だった。空虚さの指摘。

んなもんあるわけねえだろ言いがかりつけんなって返して、殴り合いになった時の。

「もし君が彼女の行動を嘲笑うと言うのなら私はそれを許しはしない」

今ここが、もし外だったなら、“俺”は問答無用でアンゼリカに殴られていたんだろう。だが実際のところここは車内で、二人が寝ているからしないってだけだ。

「嗤っちゃいねえよ。ただ底抜けのお人好しだと思っただけだ」

アンゼリカは貴族だからか、人の感情の気配ついて敏感だ。そしてそれを正面から問いかけてくる。セリに関して精度が狂ってたのは、本人がそもそも可愛いだのなんだので狂ってたんだろう。どうでもいい話だ。

だからまあとりあえず、嘘でもないラインで濁しておいた。

「……そうか」

完全には納得しちゃんない顔ではあったが、牙を収めるくらいには理解してもらえたようで何よりだと内心安堵する。

全く、こいつら全員気が抜けねえ。それでも俺は自分のやりたいようにやるって決めてここに
来た。

——だから、せいぜい隠れ蓑になってくれよと、自分の心に言い聞かせるように呟く必要
はどこにあったのか。どこにもない筈だったっていうのに。